

fig. 02 第16次-6 第1遺構面遺構検出状況

I区東半は半円形に一段高くなる部分があり、同西半部で畦畔状の遺構がみられた。この畦畔状遺構は幅約1~0.5m、高さ約0.1mで、下半は灰白色シルト、上半は灰色中砂となっており、耕土と推定される土層とはいずれも異なっていることから、確実に畦畔と断定はできない。

**自然流路** I区東半の推定耕土層及び、耕土層除去後に検出した浅い自然流路から土器細片が出土した。前者のものは時期不明だが、後者は貼りつけの断面三角形凸帯がみられ、弥生土器とすれば、前期末頃のものと考えられる。従って、耕作土と推定されるこの土層は弥生時代前期末頃を含む、それ以降と考えられる。

**16次-7 街区南寄の調査区で、2面の遺構面を検出した。**

**第1遺構面** 現地表下約60cmで遺物包含層である暗褐色シルト層（厚さ6~9cm）を検出した。この層直下で検出した（淡）灰色シルト質細砂層上面が第1遺構面である。

ピットは15基検出したが、建物を構成するものではない。ピットの大半は径13~20cm、深さ2~6cmのものであるが、S P01・02・14はやや深く、深さ10~24cmを測る。

S P03~05・07で弥生土器と思われる土器の小片が少量出土している。

**第2遺構面** 第1遺構面の基盤層である（淡）灰色シルト質細砂層の下層で検出した。淡黄灰色~淡灰色シルト質細砂層上面で第2遺構面を検出した。

確認した遺構は、ピット33基、溝1条、自然流路1条、土坑状落ち込み3基である。

**ピット** ピットは径10~40cm、深さ2~50cmを測り、S P16・25・33、S P23・31・38、S P28・34・35はそれぞれ同一建物を構成するものである可能性が考えられるが、調査区内では建物として復元できない。ピットからは遺物が全く出土していないため、時期については不明である。

**S D01** 調査区南西隅で検出した溝で、幅21~24cm、深さ20~25cmを測り、調査区内を北西から南東方向に流れる。調査区外に延びるため詳細は不明であるが、S D02に合流するもので

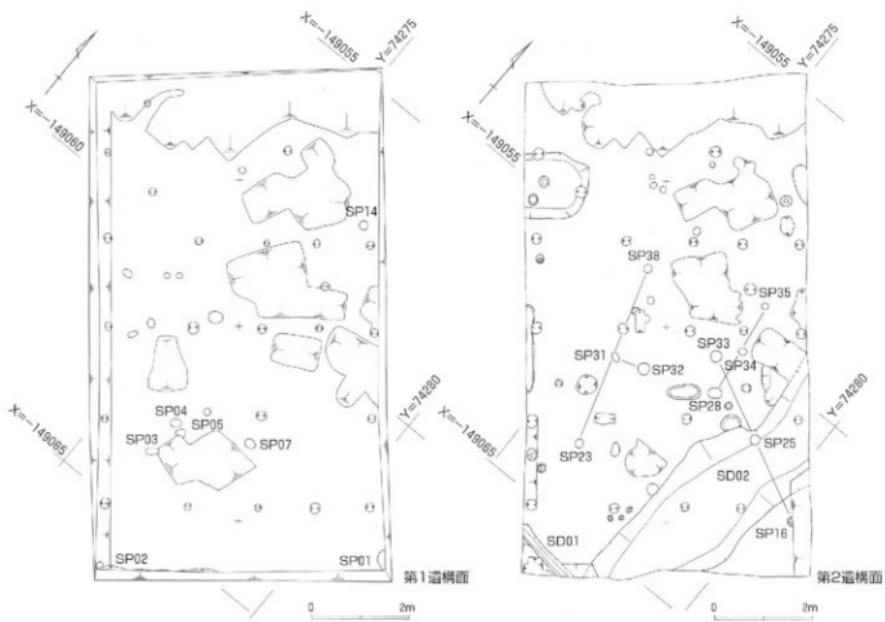


fig. 93 第16次-7調査区平面図



fig. 94 第1遺構面全景



fig. 95 第2遺構面全景

ある可能性も考えられる。

- S D02 調査区南半部分で検出した自然流路で、調査区内を北東から南西方向に流れる。出土した土器は磨耗が激しく、流路の詳細な時期については明らかではないが、縄文時代晚期から弥生時代前期頃の突帯文土器や弥生土器などが少量出土しており、弥生時代前期頃に遡る可能性も考えられる。

3. ま と め 第16次を数える松野遺跡の発掘調査であるが、第1・2次調査を実施した松野住宅より南側では、古墳時代後期前半の豪族居館と同時期の集落の他、平安時代後半から鎌倉時代前半の掘立柱建物や土坑、木棺墓が検出されている。松野住宅より北側では昨年度に続き2年目の調査で、昨年度の10次-11・20では古墳時代後期の耕作溝が確認されており、豪族居館以北は当時耕作地であったと考えられている。しかし、耕作地以外に豪族居館より北側の施設あるいは、北側を区画する施設が存在するかどうかを確認することが調査の主眼とされていた。調査の結果、今年度は擾乱を受けて遺構面の遺存状況が悪く、検出できた遺構の数は少ない。16次-1では豪族居館と同時期の須恵器が数片認められたのみであったが、遺物が出土したことから周辺には該当時期の遺構が存在する可能性が示唆される。16次-2では昨年度の10次-3南端に近く、昨年度の調査成果からもそれ程急激に遺構密度が高くなるとは考えにくく、やはり遺構の分布が稀薄な場所であったと判断される。16次-3では中世の遺物が出土し、遺構が若干検出された。ピット状遺構が検出されていることから、付近に掘立柱建物が存在する可能性が残されている。また遺物には弥生時代のものと思われる土器片もあり、当該期の集落の存在が考えられる。16次-4では遺構・遺物とともに少量しか検出されなかったことから、調査地が松野遺跡の集落域の（北側）縁辺部に位置していることが考えられる。16次-5では弥生時代の遺構しか検出されず、中世あるいは古墳時代の様相は不明である。16次-6では松野遺跡で初めて弥生時代の水田耕作土と推定されるものが確認された。しかし近隣の調査事例では確認されておらず、水田域の拡がりは現在では不明である。16次-7では建物を復元することはできなかったが、建物を構成する可能性が考えられるピットは含まれているため今後周辺地の調査においては注意が必要である。ピットからの出土遺物がないため時期については不明であるが、S D02からは突帯文土器や弥生土器が出土しており、弥生時代前期頃における居住域の可能性を示唆するものである。

以上、昨年度来から事例が増加し続いている松野通4丁目での調査であるが、依然として豪族居館と同じ時期の遺構の状態は未だ不明のままである。豪族居館の周囲を巡る掘立柱塀の一部は本街区の方向へ延びているが、その場所は南東辺の南半でまだ調査を実施していない一角にあたる。来年度以降の調査で当該時期の遺構が検出されることが期待されるが、それでも検出されなかった場合は、豪族居館に完形する遺構は本街区に及んでおらず、南隣の市道の下で収束しているものと考えられよう。

## まつ の 19. 松野 遺跡（第17～23・25・26次調査）

### 1. はじめに

松野遺跡は六甲山系西端付近の南側に広がる沖積地上の微高地に立地する遺跡である。昭和56年度に市営松野住宅建設事業に先立つ試掘調査で発見され、直後の第1・2次調査で周囲を掘立柱塗と溝で区画された古墳時代後期前半の豪族居館が確認されている。その後暫く発掘調査は実施されなかったが、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けた松野遺跡一帯は、平成7年以降は復興土地区画整理事業と区画整理後の個人住宅建設によって調査事例が増加し、今回で第23次を数えるものとなった。これまでの調査によって古墳時代後期の豪族居館およびそれと同時期の集落が確認された他、弥生時代前期、弥生時代後期、平安時代後半から鎌倉時代前半の遺構が検出され、大規模な複合遺跡であったことが明らかになっている。しかし、豪族居館から北にあたる当該地域では一転して同時期の様相は明らかではなく、弥生時代や中世の遺構が確認されるなど、松野遺跡南北とは異なる様相が次第に明らかになってきている。

今回の調査は、復興土地区画整理事業地内における個人住宅建設に伴うものである。なお、今回の調査については平成14年度に『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次発掘調査報告書』を刊行しており、本書では概要を記すに止まった、詳細については報告書を参照されたい。



fig. 96  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

平成11年度に都市計画街路予定地で実施した第9次～12調査の北東隣に位置する。調査区南半は既に地盤改良が行われて大きく擾乱を受けており、遺物包含層や遺構面も失われていた。調査区北半は、後世の耕作によって遺物包含層は削平され、わずかに遺構面上に痕跡程度に残るのみであった。遺構面も同様に削平を受けているものと考えられ、遺構もピットを1基検出したに止まる。なお、遺構面よりも下層の状況について把握するために一部断ち割り調査を実施した。現地表下約85cmに存在する淡黒灰色細砂層より土器片が

1点出土したが、そのほかに遺構・遺物等が確認されず、埋蔵文化財の括りが認められなかったので、以上で調査を終了した。

**第18次調査** 今年度に都市計画街路予定地で実施した第16次－1調査の北西隣に位置する。溝1条を検出したが、遺構から遺物は出土しなかった。

**第19次調査** 第9次－4調査の南東隣に位置する。掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑2基の他、ピットを16基検出した。

**S B01** 調査区の北西辺で検出した掘立柱建物で、明らかに遺物包含層の上面で検出した。柱間は東西方向は4間分、南北方向は1間分を検出したが、南東側にはさらに続く柱穴は存在しないため建物の南辺部分に相当する。北西側は調査区外に続くが、昨年度区画整理の街路部分の発掘調査で同じ建物の柱穴を検出しており、建物内部に未調査部分も含むが復元すると桁行6間(13.0m)×梁間4間以上(7.9m)の総柱建物になる。東西方向の柱列の方向は所謂国土座標上でE36°Nで、掘形の大きさは30~60cm、深さは15~35cmである。西側柱列と南側柱列の中には間柱となるものがあり、主柱穴の中には柱根を持つものや根石を持つものがある。主柱穴の柱間の規模は東西方向が2.0~2.4m、南北方向が1.8~2.1mである。南端の柱間の東から2・3間目には土坑SK01が存在する。

**S E01** 調査区の北隅で検出した井戸である。北東側の一部が調査区外に続くが、現状では平面は長径1.1mの楕円形、底面も長径0.7mの楕円形である。深さ1.2mで、埋土は褐灰色シルトと暗灰色シルト、それと地山構成土が塊状に混和したものである。井戸最下部の地山は淡黄褐色砂質土で、この層が涌水層となっている。井戸桿は存在しなかったが、埋土が灰色系のシルトと地山土が混和したものであることを考慮すると、井戸桿を抜き取って埋め立てたものと思われる。土器片は全く出土しなかったため時期は不明である。

**SK01** 調査区北西辺で検出した不整形の土坑で、明らかに遺物包含層の上面で検出した。長さ5.3m、幅2.9m以上、深さ約0.45mで断面は浅い皿状、埋土は上から順に淡褐灰色粘質土、褐灰色粘質土、灰色微砂、淡灰色土、淡褐灰色土である。褐灰色粘質土には別種の土の小塊や炭小片が含まれるため埋め立て土と思われ、また灰色微砂には濃密に炭が分布する部分がある。木片を焼却した後で土を被せて埋め立てたと考えられる。遺物は鎌倉時代頃の土器片が大量に出土した他、青磁片・白磁片も含まれていた。検出した状態では掘立柱建物SB01の柱穴を覆っていたが、炭片を含む灰色微砂を取り除いた状態では柱穴が検出され、柱穴を避けるように土坑が配置されていたことが判る。従って土坑と建物は同時併存しており、建物の内部に土坑が掘られていたと推定できる。建物を解体する際に不要となつた廃材を土坑上部で焼却し、不要の土器類とともに埋め立てたと考えられる。

**SK02** 調査区の中央で検出した長卵形の土坑である。長径3.6m、短径1.5m、深さ約0.35m、断面は浅い皿状であるが、底面の数カ所に椀状に窪む部分がある。埋土は上から順に暗灰茶色シルト、茶灰色粘土である。遺物は弥生土器片が出土した。

**ピット** ピットはすべて直徑あるいは長径10~70cm、深さ10~60cmである。ピットの中にはかなり深く立派なものや、小さく浅いものなどが混在していたが、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。SP01からは鎌倉時代頃の土器片が出土したが、他にはわずかに土師器の小片が出土したピットが数基あるのみである。

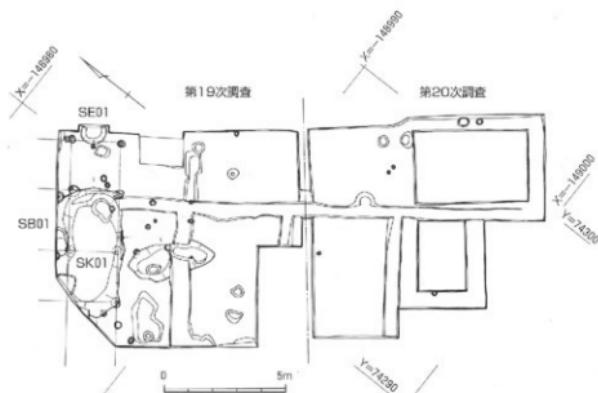


fig. 97 第19・20次調査区平面図



fig. 98 SK01全景

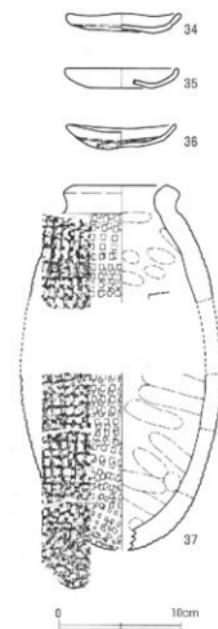
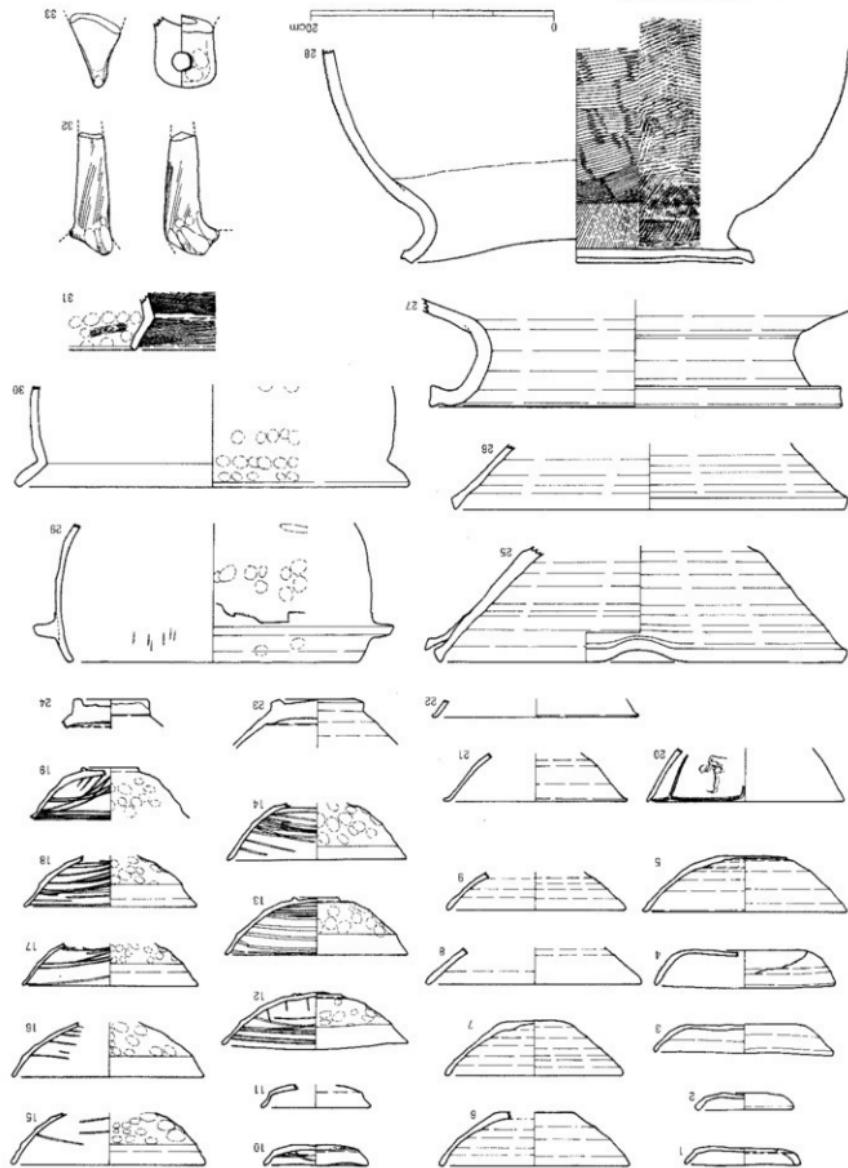


fig. 99 SK01下層出土物実測図

Fig. 100 SK01上层出土器物图



- 第20次調査** 第9次－3調査の北東隣、第19次調査の南東隣に位置する。敷地の北西半分はほぼ前面を掘削し、南東半分は幅約70cmのトレンチを外周、内部に各2本設定した。ピットを4基検出した。また遺構面の基盤層からは弥生時代前期と思われる土器片が少量出土した。
- 第21次調査** 第9次－19調査の東隣、第16次－3調査の北東隣に位置する。工事影響掘削深度である設計G.L.－1mまで調査を実施した。遺構は主に調査区の東側で検出された。検出遺構は溝1条、土坑2基、ピット1基である。遺構面上では弥生土器片がまとめて出土した。
- 第22次調査** 第9次－12調査の南西隣に位置する。ピットを18基検出した。また遺構面の基盤層から弥生時代前期の土器片が出土した。
- 第23次調査** 第16次－5調査の西隣に位置する。検出された遺構は、土坑1基、ピット16基である。ピットから土師器片1点が出土した。
- 第25次調査** 第9次－2調査の北東隣に位置する。
- 耕作痕** 東西方向の断面では、茶褐色泥砂に入り込んだ耕作痕が観察され、中世洪水砂の堆積後に耕作地として利用されていたことが判る。耕作痕の方向は現在の町割りとほぼ同様の南北方向である。
- ピット** 古墳時代遺構面では、調査区西辺で直径0.3m、深さ0.2mのピットと北辺中央部で茶褐色泥砂よりやや濃い色の土がブロック状に入ったピット状の遺構が検出された。径0.2m、深さ0.3m程の規模である。
- 出土遺物** 淡灰色泥砂、黃灰色砂泥層から微量の中世の土師器・須恵器が出土した。古墳時代遺物包含層からも微量の古墳時代の土師器・須恵器が出土した。
- 第26次調査** 第9次－3調査の南隣、第16次－1調査の西隣に位置する。溝2条、土坑1基の他、ピットを5基検出した。遺構面基盤層から弥生時代前期と思われる土器片が少量出土した。
- S D01** 調査区中央北寄で検出した東西方向の溝で、西半はわずかに北側にカーブしている。長さ8.3m分を検出したが東西両側は調査区外に続くため全長は不明である。幅0.4～0.6m、深さは約0.15mであるが、検出した北端部分は少し産んで深くなっている、深さ約0.25mになる。断面は椀状、埋土は灰茶色砂混じりシルトである。弥生土器片が少量出土した。
- S D02** 調査区の中央で検出した溝で、北側から南西方向に緩く弧状に延びている。一部が攪乱で破壊されたり、削平されて消滅したりしているが、調査区を貫通する状況で確認した。長さ8.8m分を検出したが全長は不明である。幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.1mで断面は皿状から椀状、埋土は茶色シルトである。弥生土器小片が1点出土した。
- S K01** 調査区の南東辺中央で検出した土坑である。南東側は調査区外に続くが現状では一辺3.4mの隅丸方形である。底面は不整形で凹凸が著しく、最深部の深さは約0.2mである。埋土は上から順に暗灰茶色粘質土、暗灰黄色粘質土である。遺物は古墳時代の土師器片と須恵器片が出土したが、土坑最上部には土師器の長胴甕が押し潰れた状態で出土した。須恵器は甕の胴部分の小片である。豪族居館が確認された第1・2次調査地点より北側の街区では、古墳時代後期頃の遺構は都市計画道路予定地で平成11年度に実施した第9次－11・20調査地点の2ヶ所で耕作痕が確認されているのみであった。しかし詳細な時期比定は難しいものの、この土坑も古墳時代後期頃と推定できる。
- ピット** ピットはすべて直徑あるいは長径10～20cm、深さ10～15cmで、掘立柱建物を構成するよ

うにはまとまらなかった。遺物は出土しなかった。

**3. まとめ** 第26次を数える松野遺跡の発掘調査であるが、古墳時代後期前半の豪族居館を確認した第1・2次調査を実施した松野住宅より南側は、豪族居館と同時期の集落の他、平安時代後半から鎌倉時代前半の掘立柱建物や土坑、木棺墓が検出されている。しかし松野住宅より北側は一転して遺構密度が低くなり、しかも同じ時期の遺構は耕作溝を除くと確認されていなかった。出土遺物が少ないため遺構の時期比定が難しいが、わずかに確認できた遺構も弥生時代後期頃のものが多く、極稀に弥生時代前期のものがある程度である。第17次調査では遺構面の遺存状況が悪く、ピットを1基検出したのみであった。第18次調査でも遺構面の遺存状況が悪く、溝を1基検出したのみであった。第19次調査で検出した掘立柱建物と土坑は鎌倉時代頃のもので、昨年度の区画整理の街路部分に伴う第9次調査の成果と合わせると桁行13mの比較的大きな建物であったことが復元できた。また復元建物の北隣に位置し、昨年度実施した個人住宅に伴う第13次調査でも同じ頃の掘立柱建物を検出しており、当時の集落が営まれていたことが明らかとなった。ただ松野住宅より北側では他に同時期の遺構は確認されておらず、集落自信が松野住宅より南側の集落を含んで散村的状況にあるのか、あるいは東側の松野通3丁目方向に拡がっていくのか現状では不明である。今後周辺の調査事例が増加していく中で解明されていくものと思われる。第20次調査では遺構面の遺存状況が悪いことと調査区の幅が狭かったことのため、ピットを4基検出したのみであった。第21次調査で確認された状況は北側隣接地で平成11年度に実施した第9次-3調査の状況と同様で、東側を中心に遺構が確認されており、東側が安定した土壤で遺構が存在し、西側は湿地状に落ちていく状況であった。その中で遺構面上から出土した弥生土器片は磨滅した小片ではあるが、平成11年度の第9次-1調査では土坑内から前期の完形の甕が出土している他、遺構面上からも前期の土器が出土しており、今回出土した土器も胎土等が類似していることから前期のものであると考えられる。近隣に弥生時代前期の遺構が存在するものと考えられる。第22次調査では弥生時代のピットを多く検出したが、掘立柱建物を構成するようにはまとまらなかった。第23次調査では遺物包含層から古墳時代の須恵器壺蓋片が1点であるが出土し、周辺には該当時期の遺構が存在する可能性を示唆される。第25次調査では比較的良好に遺構面が遺存していたが、遺構・遺物もほとんどなく、時期や調査対象地の性格などを明確にすることはできなかった。第26次調査では耕作痕を除くと初めて古墳時代後期の遺構が確認された。耕作溝は平成11年度の第9次-11・20調査で確認されており、豪族居館以北は当時耕作地であったことは確実であるが、その他にも遺構を伴う当時の人々の行動が存在したことが判明した。

以上、昨年度来から事例が増加し続けている松野通4丁目での調査であるが、しかし依然として豪族居館の北側を区切る遺構の有無あるいは状態は未だ不明のままである。豪族居館の周囲を巡る掘立柱塀の一部は本街区の方向へ延びているが、その場所は南東辺の南半でまだ調査を実施されたことがない部分にある。今後この部分で個人住宅等に伴う調査が実施された際には区画施設が検出されることが期待されるが、それでも検出されなかつた場合は豪族居館に関係する遺構は本街区に及んでおらず、南隣の市道の下で収束しているものと考えられよう。

## 20. 松野の遺跡 第24次調査

1. はじめに 新長田駅南地区再開発事業若松町7丁目地区の北西隅部の調査区で、7丁目では5度目の調査にあたる。



fig. 101  
調査地位置図  
1 : 2,500

2. 調査の概要 基本土層 層序は北壁では現代盛土、旧耕土及び床土、黄色泥砂（中世洪水砂）、灰黒色砂泥（造構面、以下地山）、黄褐色砂泥、暗茶褐色砂泥となる。造構面は南方向に下がり、北2/3では造構面は粘質の灰黒色砂泥であるが、南1/3の造構面は淡褐色砂泥になる。この南1/3には造構面上に部分的ではあるが、古墳時代遺物包含層である茶褐色泥砂が存在する。

中世洪水砂から土師器・須恵器・青磁片や滑石製鍋などが出土した。また古墳時代の須恵器高环の坏部分が半個体分、洪水砂の各所から出土した。古墳時代遺物包含層からは微量の土師器・須恵器が出土した。

検出された造構は、今述べた中世の耕作痕と古墳時代の掘立柱建物とピットである。中世の耕作痕は、現在の町割り方向で東西方向と南北方向に検出された。南北方向の耕作がその殆どであり、東西方向と南北方向の切り合い関係は明らかにできなかった。断面観察から、中世のある時点で灰黒色砂泥層が黄色泥砂層と混潤し耕起された痕跡が断面に観察された。



fig. 102 調査区北壁土層断面図

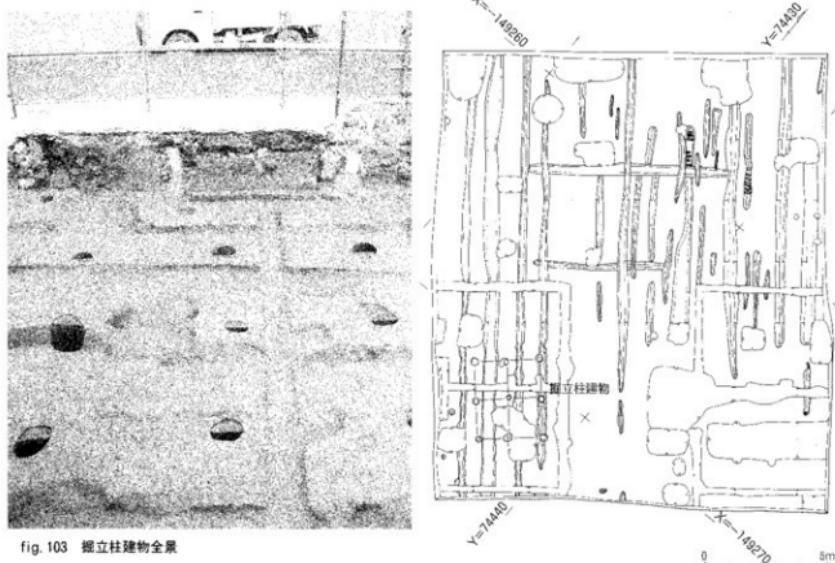


fig. 103 掘立柱建物全景

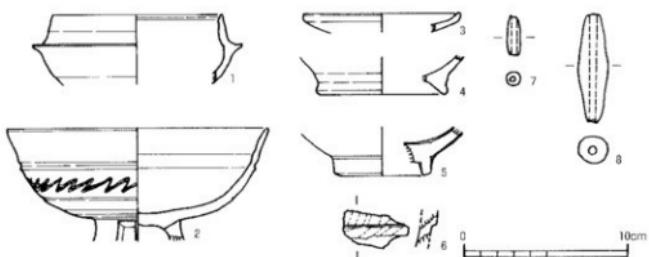


fig. 105 黄色泥砂(洪水砂)出土遺物実測図

**掘立柱建物** 調査区南西部で掘立柱建物が検出された。建物は、2間×2間の総柱建物で、東西柱間1.3m・南北柱間1.5mである。面積約7.8m<sup>2</sup>の非常に小さい規模の建物である。柱穴は径0.3m前後・深さ0.2~0.6mの規模で、柱痕は判然としないものが多い。柱穴からの出土遺物は殆どなかった。ほかに建物周辺で3ヶ所ピットが検出された。

**3. まとめ** 日吉2丁目地区南西部(第6次~4調査)からは、遺構は極めて稀薄になる区域である。当調査区でも日吉2丁目地区から連続して、中世耕作痕以外は検出されない遺構の空隙地である。

南東隅部では、極めて面積の小さい掘立柱建物が1棟検出された。遺構の空隙地を挟んで、第4次~2調査地区に向けてまたある程度の遺構密度が高くなる兆しであろうか。

## 21. 二葉町 遺跡 第12次-1~7 調査

1. はじめに

平成17年1月17日に発生した阪神・淡路大地震は、神戸市内に甚大な被害を及ぼした。その中で、二葉町遺跡の所在する長田区二葉町・久保町・腕塚町一帯は、最も被害の大きかった地区のひとつである。その復興に伴う再開発事業地内の発掘調査は平成8年度から実施され、これまでに中世を主体として、弥生時代・奈良時代～中世の遺構・遺物が検出されている。今回の調査は昨年度に引き続き、再開発事業地において、既存家屋の移転の完了した部分について発掘調査を実施した。

なお、今回の調査については、既に平成13年度に『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査』を刊行しており、本書では概要を記すに止った。詳細については報告書を参照されたい。



fig. 106  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 2 調査の概要

二葉町地区に位置する。今回の調査範囲の内、1区の南半部は、昨年度調査（第9次－4・旧第8次－4）において、北へ延びる掘立柱建物が検出されたため今年度調査範囲と合わせて調査を行った。他の部分については2～5区として設定し、発掘調査を実施した。

1 / 8

1区では、今年度掘削を開始した北半部では擾乱の影響を受けていたものの、比較的良好な状況で遺構面が遺存していた。昨年度検出の南半部を含めて、飛鳥時代の土坑1基、奈良から平安時代の溝1条、中世の掘立柱建物2棟、溝8条、ピット多数を検出した。

- 2 区 2区では溝3条、大型の土坑状遺構1基を検出した。共に出土遺物はなかった。
- 3 区 調査区内の大半が従前の建物基礎による擾乱の影響を受けており、遺構面が確認されたのは一部であった。調査区中央部で土坑1基を検出した。
- 4 区 全体的に擾乱を受けていたが、掘立柱建物1棟、溝4条、土坑3基、ピット15基を検出した。掘立柱建物（SB202）は、平成10年度の南側隣接地での調査（第8次-1・旧第7次-2）の柱列と一致した。北辺中柱で柱抜き取り後に須恵器壺の体部が埋納された状況で出土した。掘立柱建物は、奈良時代から平安時代のものと考えられる。
- 5 区 掘立柱建物1棟、溝2条、土坑2基、ピット20基余を検出した。
- 掘立柱建物（SB321）は微細な遺物のみの出土で、時期の確定は困難であるが、概ね鎌倉時代前半の時期が考えられる。
- 第12次-2調査 久保町地区に位置する。一部で従前建物基礎等による擾乱の影響を受けていたものの、良好な状況で遺物包含層、遺構面が遺存し、多数の遺構・遺物を検出した。
- 弥生時代 土坑1基を検出した。検出した土坑（SK101）からは弥生時代前期後半の壺型土器が出土した。
- 平安時代 土坑1基を検出した。土坑（SK301）からは土師器皿・壺が正位置で据えられた状態で出土した。出土遺物から10世紀半ばの時期が考えられる。
- 中世 多数の遺構を検出した。検出した遺構の大部分がこの時期のものである。
- 掘立柱建物6棟、溝多数、土坑墓、土坑、落ち込み、ピット多数を検出した。掘立柱建物は12世紀後半から13世紀初頭にかけてのものと考えられる。また、溝は方向がほぼ南北・北東方向のものである。出土遺物から12世紀中頃から後半にかけてのものと考えられ、掘立柱建物群の造営が始まる直前まで機能していたと推定される。平安時代末から鎌倉時代前半にかけて、耕地から掘立柱建物群が造営されて行く状況を示すものと考えられる。



fig. 107 第12次-2調査区全景



fig. 108 遺構検出状況



fig. 109  
第12次-3  
調査区全景

**第12次-3調査** 二葉町地区に位置し、検出された遺構には掘立柱建物5棟・土坑・溝・柱穴等がある。掘立柱建物は平安時代末から鎌倉時代にかけてのもので、溝は平安時代後期、土坑は平安時代前半の時期が考えられる。

近接地におけるこれまでの調査成果から、当調査地は遺構の密度が低くなる部分、すなわち遺跡の縁辺部にあたるものと推測された。しかし、発掘調査の結果、平安時代前半～および平安時代末～鎌倉時代の遺構が多く確認され、逆にこの周辺はこれまでに検出されているものとは別の遺構集中地点になることを確認できた。この周辺は平坦地であり地形的に区画できない。遺構の疎密をもちらがらも東、あるいは北にこの遺跡はさらに広がるものと考えられる。

二葉町遺跡は平安時代末には存在した駒ヶ林の港の北に接した位置にあたり、北1kmほどには官道である山陽道が通り、西に須磨駅に比定される大田町遺跡が存在する。二葉町遺跡では奈良時代～平安時代前半の方形掘形をもつ掘立柱建物がこれまでにも確認されている。港にも官道にも近いという立地は律令期の遺構を考える上で示唆的なものである。一方、平安時代後期～鎌倉時代にかけての掘立柱建物から出土した漁具類は海に関わる当時の生活の一端を示している。

**第12次-4調査** 二葉町地区に位置する。今回の調査で検出された遺構は掘立柱建物2棟の一部、土坑4基、溝5条、ピット約70個などである。

掘立柱建物は調査区の西北部で検出されたもので、平成10年度の第8次-2（旧7次-3）調査で確認された建物（SB302）の南東コーナー部分にあたるものであった。13世紀前半の時期が考えれる。もう1棟は南西部で検出されたもので、SB302と同じく第8次-2（旧7次-3）で確認された建物（SB306）の一部であった。出土遺物から13世紀前半のものと考えられる。

溝（SD301）からは、土師器や瓦器片とともに白磁片の小片が出土している。また、人為的な加工痕跡はみられなかったが、紀ノ川流域や吉野川流域で産出する綠泥片岩の手のひら大の板石が2点出土している。用途は不明だが、注目すべきものである。中世段階



fig. 110  
第12次-4  
調査区東半全景

ではあまり出土例の知られないもので、海を通じて紀伊地方あるいは四国（徳島）地域とのつながりを持っていたことがうかがわれ、当時の交流のあり方を知る上で重要な資料と考えられる。これらの遺物は、時期的に鎌倉時代の初め頃のものと考えられる。

#### 第12次-5調査

腕塚町地区に位置する。2面の遺構面が確認された。

##### 第1遺構面

遺物包含層から中世の遺物が出土した。

##### 第2遺構面

中世の畠の耕作土下面で検出された遺構面。中世の耕作痕とそれ以前、弥生時代前期の土坑・縄文時代晚期の流路が検出された。

条理方向に合う幅20~50cmの溝多数が検出されたが、南西-北東方向のものが多く、北西-南東方向のもの少い。第12次-5調査地に限ってみれば、前者が後者よりも新しい。

土坑（SK101）からは弥生時代前期の土器が出土した。流路（SR101）からは縄文時代晚期の土器が出土している。

#### 第12次-6調査

二葉町地区に位置する。遺物包含層は西半でわずかに確認されたに過ぎない。西半でピットとともに井戸を検出した。ピットは建物としてまとまらなかった。

井戸は素掘りのもので、井戸枠等ではなく、井戸底に土器の甕が1点据えられていただけであった。出土遺物から8世紀後半のものと考えられる。

#### 第12次-7調査

二葉町地区に位置する。調査区全体でピット、土坑が検出された。ピットは周辺の調査により第12次-3調査で検出された平安時代の掘立柱建物（SB203）、中世の掘立柱建物（SB319・320）を構成するものであった。

土坑は二葉町遺跡や戎町遺跡でも確認されている大型土坑の一部である。北側に隣接する平成5年度に実施した第2次調査区に統くものである。半分以上が調査区外にあるため規模は不明である。埋没時期は14世紀代と考えられるが、性格な時期については特定できていない。

## ふたばちょう 22. 二葉町遺跡 第13次調査

### 1. はじめに

二葉町遺跡は妙法寺川等により形成された沖積地に存在する。標高は4mである。現在までの調査では中世の掘立柱建物、木棺墓、井戸等が確認されており、中世集落の存在が明らかになっている。

今回の調査は昨年度実施した第9次調査に引き続き、同一の調査区内で、再開発ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施した。

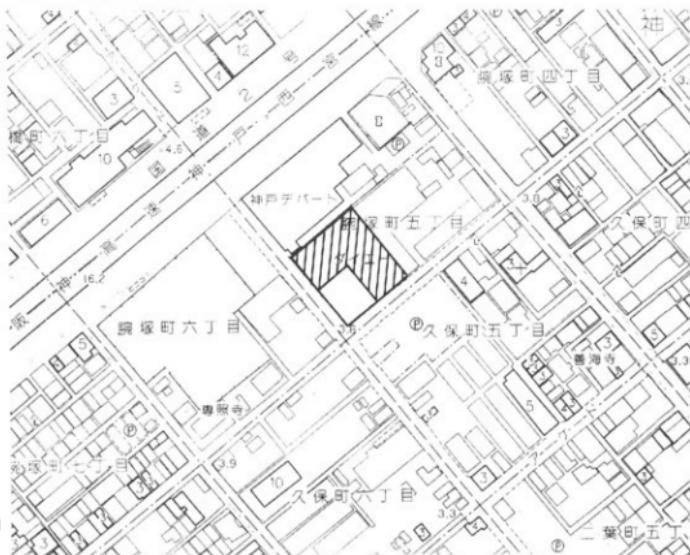


fig. 111  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

#### 基本層序

基本層序は盛土・旧表土・茶灰褐色細砂～中砂（近現代）・暗灰色シルト混じり細砂～極細砂（中世遺物包含層）・淡黒灰色シルト混じり細砂～極細砂（中世遺物包含層）・暗黃灰色シルト（遺構面）となる。

#### SD-01～

06・09

幅約30cm～40cm、深さ約30cmを測る溝である。耕作痕の可能性が高い。座標北から東へ50°～52°の角度で、すべて北東～南西方向に並行して延びている。これらの溝は、SD-09を除き、南西端は途切れで無くなっている。北東側は、すべてSD-10に合流している。溝間の幅は均等で、約3.0mを測る。溝内の埋土から、中世前期の須恵器と土師器の小片が出土している。

#### SD-07

第9次調査から引き続き、調査区中央で検出した。北西～南東方向に延びる溝である。黒灰色シルトが堆積している。遺物は出土せず、遺構の時期は不明である。

#### SD-10

調査区東端で検出した、座標北から西へ37°の角度で南北方向に延びる溝である。幅約50cm～60cm、深さ約20cm～30cmを測る。SD-01～06・09と、ほぼ直角に接合している。

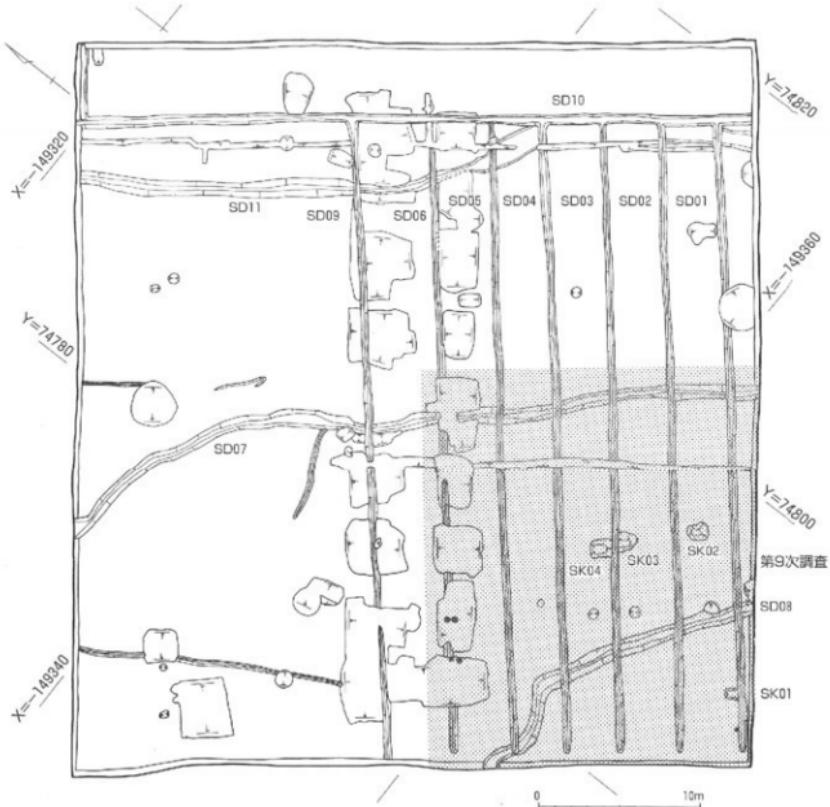


fig. 112 調査区平面図

中世前期の須恵器と土師器の小片が出土している。

**SD-11** 調査区東端で検出した南北方向に延びる溝である。幅約50cm～100cm、深さ約15cmを測る。黒灰色シルトが堆積しており、遺物は出土していない。

### 3. まとめ

今回の調査では耕作痕と溝を検出している。耕作痕からは遺物の出土は少ないが、遺物包含層からは12世紀～13世紀までの遺物が比較的多く出土しており、耕作痕の時期も同様だと理解できる。

遺構面には牛の足跡が残り、水田であった事が理解できる。耕作痕は、この水田に伴う排水等の目的で掘削された溝の可能性がある。

他の溝は遺物の出土が稀薄であるため、時期決定は難しい。ただし、第9次調査で検出したSK-01から、6世紀頃の須恵器壺の破片が出土している。第9次調査を含め、耕作痕を除く溝と土坑の埋土は全て類似しており、同一時期の可能性も考えられることから、すべて6世紀頃の遺構とも考えられる。

23. 二葉町遺跡 第14次調査

1. はじめに

平成17年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、神戸市内に甚大な被害を及ぼした。その中で、長田区久保町一帯は、最も被害の大きかった地区のひとつである。その後復興に伴う再開発事業地内の発掘調査は平成8年度から実施されている。久保町においては、平成8年度から6丁目において発掘調査が実施され、主に弥生時代前期、奈良時代～中世の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は再開発事業地内において、既存家屋の移転の完了した部分について発掘調査を実施した。

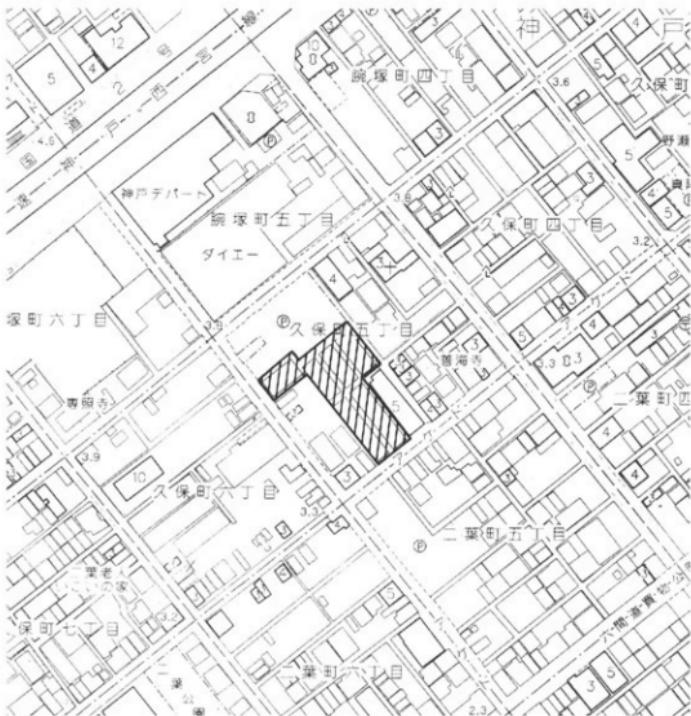


fig. 113  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

調査は道路を挟み、南側を1区、北側を2区、2区から西側に張り出した部分を3区として実施した。尚、遺構番号については2区の調査開始後すぐに3区の調査を優先することが生じたために、3区から遺構番号の開始をしている。

基本層序は、基本的に旧耕土層下はほぼ全域で遺構面である暗黄灰色粘質土若しくは、回シルトであったが、一部では遺物包含層である暗灰褐色砂質シルトが残存していた。

- 1 区** 1区では、調査区内の大半が従前建物の基礎による擾乱の影響を受けており、遺物包含層及び遺構面が西側の一部に残存していたのに過ぎなかった。  
北側の4/1については2ヶ所の試掘坑を設定した結果、建物基礎による擾乱が延びていることが確認されたため、掘削を中止した。
- 2 区** 2区では1区同様、西側の大半が従前建物の基礎による擾乱の影響を受けていたが、東側で遺物包含層及び遺構面が確認された。溝4条、ピット数基を検出した。  
尚、南側4/1については1区同様1ヶ所の試掘坑を設定した結果、建物基礎による擾乱が延びていることが確認されたため、掘削を中止した。
- S D14** S D14は調査区やや西寄りを貫通する溝で、北側と南側は調査区外へと続いている。幅30cm前後、深さは検出面から10~15cm、埋土は基本的には暗灰色シルト、一部でその下層に黒褐色シルトが認められた。須恵器・土師器片が出土した。
- S D15** S D15は調査区北隅で検出した東西方向の溝である、一部を検出したのみであり、幅等については不明である。深さは検出面から15cm前後、埋土は暗灰色粘質土である。  
S D16・17と並行するものと考えられる。
- S D16** S D16は調査区北半部で検出した東西方向の溝である。調査区の西端付近で北西側に向きを変えているが、西側を擾乱により切られている。北西側、東側は調査区外へ続いている。幅1m前後、深さは検出面から20cm、埋土は2層に分かれ、上から黒褐色粘質土、灰色粘質土である。微細な土師器片が出土しているが、時期は不明である。
- S D17** S D17は調査区南半部で検出した東西方向の溝である。S D16と並行する。東側は調査区外へと続き、西側は擾乱により切られている。幅70~80cm、深さは検出面から30cm前後で埋土は3層に分かれ、上から順に黒褐色粘質土、暗灰色粘質土、暗灰褐色粘質土若しくは同極細砂である。微細な土師器片が出土しているが、時期は不明である。
- S D18** S D17は調査区南半部で検出した南北方向の溝である。南側と北側は調査区外へと続いている。幅30cm、深さは検出面から20cm前後、埋土は黒褐色粘質土で、断面形はU字形である。弥生時代中期頃の遺物が出土している。
- ピット** 8基のピットを検出したが、建物等を構成するものであるかは不明である。  
検出したピットはいずれも円形で、直径20cm前後、深さは検出面から10cmである。S P 04から土師器の微細な小片が数点出土した以外は遺物の出土はなかった。
- 3 区** 3区は従前建物の基礎による擾乱をほとんど受けておらず、良好な状態で遺物包含層、遺構面が確認された。溝13条、土坑4基、ピット数基を検出した。
- S D01** S D01は調査区北半部東側で検出した幅55cm前後、深さは検出面から25cm前後の南西方向の溝である。西側ではほぼ直角に向きを変えて、北西方向に延びている。埋土は2層に分かれると、共に黒褐色粘質土で上層には砂が混じる。微細な土師器片が出土している。
- S D02** S D01の南西側で検出した幅30cm前後、深さは検出面から9cm前後の溝で、S D01に南東側で切られている。向きもS D01に並行する。埋土は2層に分かれ、上から淡暗灰色粘質土、淡暗褐色粘質土である。出土遺物はなかった。
- S D03** 調査区北半部西側で検出したほぼ南北方向の溝である。西側で直角に向きを変えて、西へ延びている。幅30cm前後、深さは検出面から9cm前後で、西側をS D09・11・12に切ら

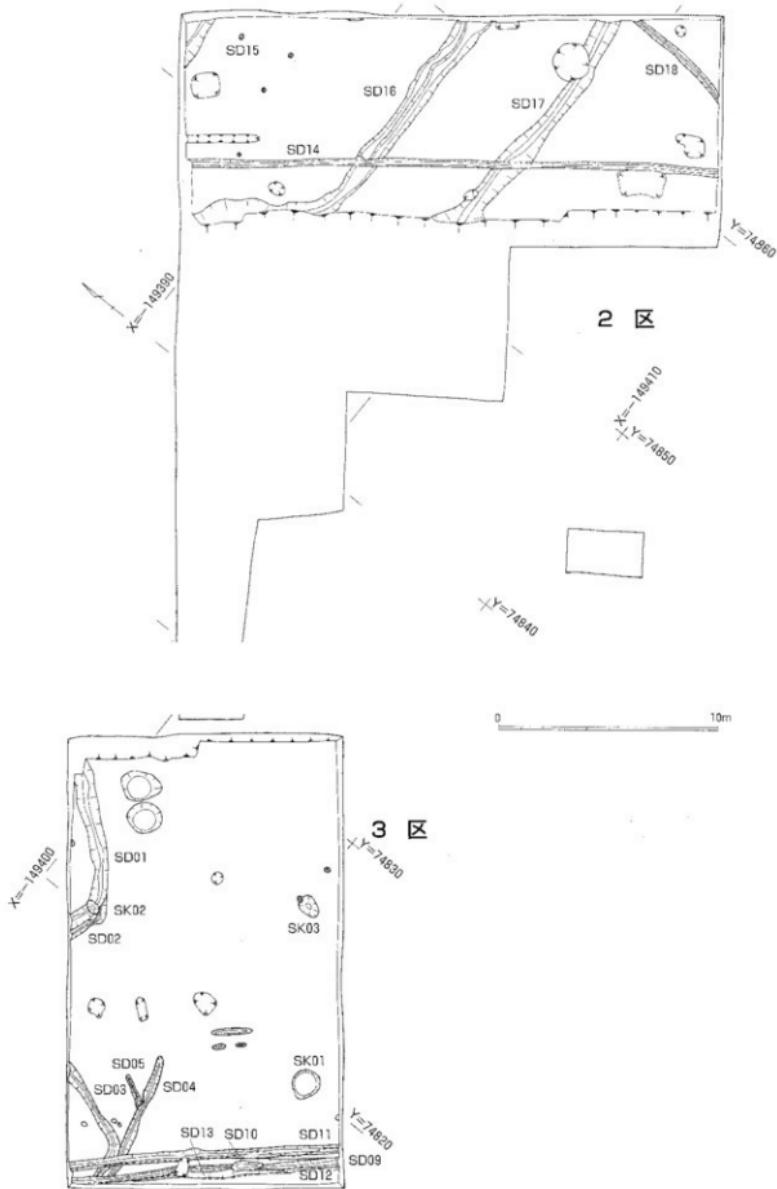


fig. 114 2・3区調査区平面図

- れている。埋土は暗褐色シルトである。微細な土師器片が出土している。
- S D04 調査区北半部西側で検出したほぼ東西方向の溝である。幅30cm前後、深さは検出面から20cm前後で、埋土は淡暗褐色シルトである。西側をS D03とS D09・11・12に切られている。微細な土師器片が出土している。
- S D05 S D04の北西側で検出した南西・北西方向の溝である。幅20cm前後、深さは検出面から8cm前後で、埋土は暗褐色シルトである。南西側をS D04に切られている。
- S D06 ~08 調査区中央部やや西寄りで検出した北西・南西方向の溝であるが、後世の削平により一部が残存しているに過ぎなかった。幅はS D06・07が10cm、08が30cm、深さはいずれも検出面から2cmで、埋土はS D06・07が暗灰色シルト、S D08が淡灰褐色シルトである。出土遺物はなかった。
- S D09 ~13 調査区の西端部で検出した南西・北西方向の溝である。切り合いを持ち、ほぼ同一の位置に存在している。何度かの作り替えによるものとも考えられる。切り合い関係からS D13、12、10、11、09の順に作り替えがあったものと考えられるが、S D10は両端が確認されず、S D09の一部が低く窪んで、落ち込み状を呈していた可能性も考えられる。
- 規模はS D09が幅80cm前後、深さは検出面から10cm前後である。他は切り合いがあるために元来の規模ではないが、検出状況でS D10が幅45cm、深さ14、S D11・12が幅30~40cm、深さ15~20cm、S D13については所々に一部が残存しているのみであった。
- 中世の遺物が出土しているが、S D09から12世紀後半~13世紀初めの須恵器・土師器・青磁・白磁が比較的まとまって出土した。
- S K01 調査区南半部西側で検出した径1.2m前後、深さ検出面から65cmの土坑状遺構である。掘形内からの曲物、木枠等の出土はなかったが、比較的湧水が認められることから、井戸である可能性も考えられる。
- S K02 S D01が向きを変えるコーナー部分に位置する長径90cm、短径46cm、検出面からの深さ12cmの土坑状遺構である。埋土は暗黒褐色シルト。出土遺物はなかった。
- S K03 調査区南半部中央付近で検出した長径1m、短径90cm、検出面からの深さ35cmの土坑状遺構で、北端をピットに切られる。埋土は淡褐灰色砂質シルト。出土遺物はなかった。
- ピット 8基のピットを検出したが、いずれも径10~30cm、検出面からの深さ10~20cmで、建物等を構成するものであるかは確認できなかった。
3. まとめ 今回の調査では調査地の大半が従前の建物基礎による攪乱を受けていたが、2区東側、3区では、良好な状態で遺物包含層・遺構面が確認され、遺構を検出することができた。遺構の分布状況は西側が比較的多く、遺物の出土もまた同様であった。このことはこれまでの調査で、現在の大正筋商店街の西側で奈良時代、平安時代~鎌倉時代初めの遺構・遺物が多数確認されており、S D09~14などはこれら遺構群とほぼ同一時期であると考えられる。しかし、これ以外の遺構についてはさらに時期を遡るものであると考えられるが、出土遺物は極めて微小であり、2区S D18で弥生時代の遺物が出土した以外は時期の特定が困難である。埋土の状況から比較的近い所産であると考えれば、3区S D01~03のほぼ直角に曲がる溝の性格が注目されるが、方形周溝墓等であるかは確認できなかった。

## えびすちょう 24. 戂町遺跡 第31次調査

### 1. はじめに

戎町遺跡は妙法寺川右岸流域の扇状地末端から沖積地にかけて立地する遺跡で、これまでの調査によって、弥生時代前期から鎌倉時代前半までにわたる複合遺跡として知られている。中でも、弥生時代前期の小区画水田址や弥生時代中期中頃の遺構頻度の高さは、当該期の西摂西端の拠点的な集落として遜色のない内容となっている。

今回の調査対象地区は第30次調査地点の北西側に隣接し、第12次調査地点の北側に当たる。マンション建設工事に先立つ調査で、震災復興に伴う住宅供給に係る調査である。

発掘調査はマンションの建物部分と駐車場部分について実施した。



fig. 115  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

**基本層序** 基本層序は概略的に見ると、下層から順に基盤層となる淡青灰色シルト混じり細砂、暗緑灰色シルト（弥生前期包含層）、黄色系砂層、黄色～乳色粘質土、暗褐色シルト質細砂（弥生中期包含層）、黒褐色シルト（弥生後期末包含層）、青灰色砂質土（旧耕土）、擾乱・盛土層が堆積し、現地表面に至る。

以上でも明らかなように、確認できた遺構面は弥生時代前期後半・弥生時代中期前半・弥生時代後期末・古墳時代前期～鎌倉時代前半にわたる4面である。

**第4遺構面** 土坑5基、落ち込み3基、溝状遺構3条、ピット42基、流路状の落ち込み（SR501）（弥生時代前期後半）などが確認された。

**SK502** 長径1.53m、短径1.07m、最大深さ20cmの梢円形の土坑で、弥生土器がまとまって出土している。埋土最下層は黒色シルトの炭層で、これより上層は焼土と暗緑灰色シルト質細砂～細砂が互層になっている。土坑の壁面の被熱痕跡は確認できていない。

**SK503** 長径3.21m、短径0.95m、最大深さ29cmの長梢円形の土坑で、底面は船底形となっており、一部坑壁は抉れている。出土遺物はいずれも土坑底から浮いており、弥生土器片と獸骨片がある。

**SK505** 長径1.31m、短径1.24m、最大深さ33cmの不整円形の土坑である。埋土は上下2層に分けられ、下層の炭粒を多く含む暗緑色極細砂～細砂混じりシルトから、弥生土器片と獸骨が出土している。貯蔵穴のようなものと考えられる。

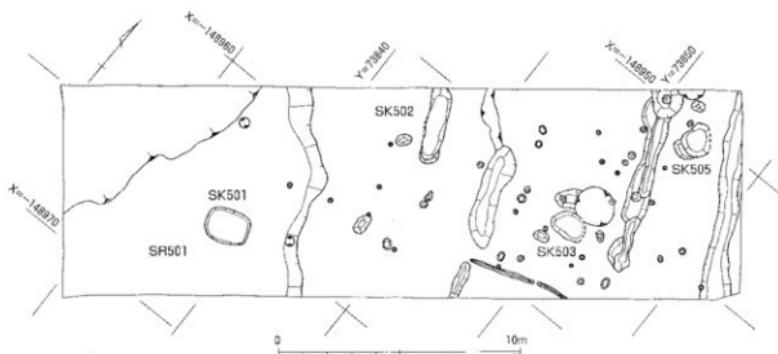


fig. 116 第4遺構面平面図

**S R501** 調査区の西端を占める浅く、大きな落ち込みである。肩部は不明瞭で、遺構面との比高差約10cm、底面はさらに西に向かって徐々に下がって行く。埋土は暗緑灰色極細砂質シルトを主体とし、完形品を含む多量の弥生土器を包含している。第1・4次調査地点で確認されたような流路の肩部のようなものであろうか。また、暗緑灰色シルト質極細砂～細砂を埋土とする長軸1.91m、短軸1.42m、深さ15cmの隅円方形の土坑（S K501）も確認されている。

**第3遺構面** 円形窓穴住居1棟のほか、平地式住居を想定できる「コ」字形の溝状遺構（S X320）や土坑13基、落ち込み20基、ピット133基などの遺構があり、今回の調査では最も遺構の頻度が高い遺構面である。なお、調査区の一部では、乳色細砂の薄層をはさんで、遺構面を形成する黄色シルト質極細砂～細砂が2枚確認できる部分があり（2・3区あるいは6区で顕著）、上層から切り込むものと、下層から切り込むものの別があったようであるが、厳密に掘り分けることができず、ほぼ同一面で確認してしまっているため、遺構の重複が顕著であり、本来は一部には中期の遺構面が2枚存在していた可能性がある。

**S B301** 復元径約7mとなる円形窓穴住居で、壁高さ15cmである。床面では中央土坑1基と柱穴12基が確認された。主柱穴の配置から5本柱で上屋が構成され、建て替えが1度行われたものと考えられる。埋土からは多量の弥生土器が出土しているが、床面に密着するものではなく、南側周壁で完形の壺1点が出土している程度である。

**S K304** 長径2.92m、短径1m以上、最大深さ29cmの不整形の土坑で、東半はS B202に切られている。埋土は3層に分けられ、中層にあたる暗乳灰褐色シルト混じり細砂から土坑南半に集中して弥生土器壺片が多数出土している。

**S K306** 長径1.45m、短径0.84m、最大深さ17cm、2段に掘り込まれた不整円形の土坑である。主な埋土は黒色～黒褐色系の極細砂質シルトで、中期中葉の弥生土器が出土している。

**S K307** 長径1.45m、短径0.84m、最大深さ17cmの梢円形の土坑である。底面から浮いた状態で弥生土器片と石包丁（未穿孔のため未製品か）1点と円礫1点が出土している。埋土は淡褐色～淡褐色シルト質極細砂である。

**第2遺構面** 確認できた遺構には、方形堅穴住居3棟、溝1条、流路1条のほか、ピット0基が確認  
(弥生時代後葉) できた。

**S B201** 東西4.3m、南北3.8mの隅円長方形の堅穴住居で、壁高20cmを測る。東西辺に沿って幅約1m、高さ4cmの主柱穴を伴った屋内高床部が設けられている。主柱穴は直径30cmで、直径12cmの柱痕が確認できるものの、深さは10cmにも満たない。内区の床面中央には中央土坑（直径55cm、深さ6cm、埋土は炭を多く含む黒色極細砂質シルト）1基と台石が据え

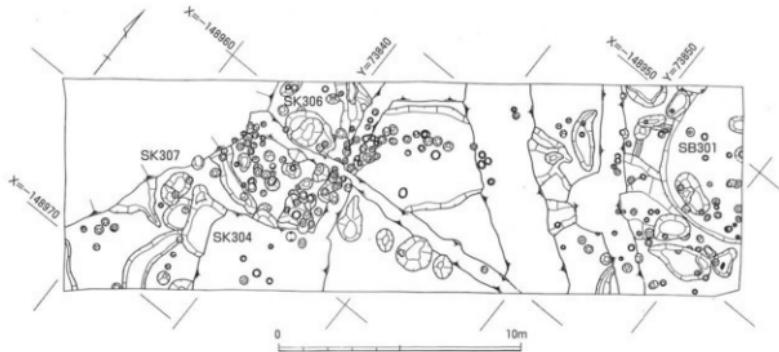


fig. 117 第3遺構面平面図

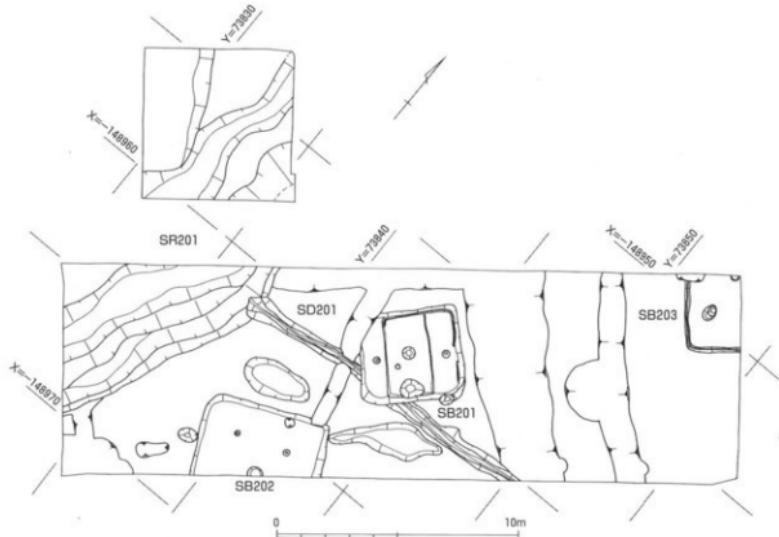
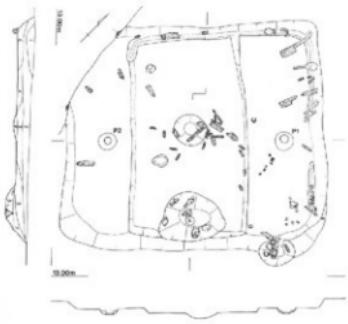


fig. 118 第2遺構面平面図



fig. 119 S B201全景



1. 淡乳褐色シルト混じり細砂  
2. 暗灰褐色シルト質極細砂～細砂  
3. 淡乳褐色小袋～中袋を含む砂質土  
4. 暗褐色シルト質極細砂～細砂  
5. 暗褐色シルト質細砂  
6. 暗褐灰色シルト質極細砂～細砂  
7. 淡褐灰色シルト質極細砂  
8. 暗褐灰色シルト質極細砂  
9. 黒色極細粒質シルト  
10. 暗褐色シルト質細砂～細砂

fig. 120 S B201平面図・断面図

られ、南辺には貯蔵穴（85×101cm、深さ18cm）が設けられる。また、周壁溝は完周せず、北辺にのみ確認できた。

出土遺物の大半は埋土から出土した多量の弥生土器であるが、原位置を保っているのは貯蔵穴から出土したのみで、壺・高杯などがある。

住居内のはば全面で、床面からやや浮いた状態で炭化材を多数検出していることから、焼失住居と考えられる。なお、S B201はS D201を切っている。

**S B202** 東西5.3m、南北3.6m以上の隅円方形の竪穴住居で、壁高21cmを測る。床面には主柱穴2基と中央土坑（直径約60cm、深さ7cm、埋土は炭を多く含む淡黒色シルト）1基が確認され、周壁溝は確認できていない。南半は調査区外に延びる。

主柱穴は柱間距離が2.15mで、直径25cmの掘形内に直径11cmの白灰色シルトの柱痕が確認できる。出土遺物の大半は埋土からのもので、床面に密着したものはない。

**S B203** 第3遺構面に伴う遺物包含層を掘削中に確認できた隅円方形の竪穴住居で、南北3m以上、東西2.2m以上で調査区外に延びる。幅20cm前後、深さ15cmの周壁溝1条と床面でピット1基が確認できたにすぎない。主柱穴は不明である。P1は長径71cm、短径50cm、深さ43cmのもので、最上層から弥生土器の小片が集中して出土している。

**S D201** 調査区を東西方向に貫く溝状遺構で、幅0.6m前後、最大深さ0.45mで、総延長は12.7mである。溝底は東から西へ向かって徐々に深くなってしまっており、S R201に向かって流れていたものと推定できる。埋土は淡褐色系のシルト質極細砂～細砂を主体とし、完形品を含む大型の弥生土器片が多量に出土している。一方、上半層はシルト層を主体とするが、ほとんど遺物は出土していない。

**S R201** 調査区の西端を南流する流路で、検出幅で約10m、最大深さ1.85mである。埋土は上半と下半で大きく異なり、下半は乳灰色系の極細砂～砂礫を中心とし、完形品を含む大型の弥生土器片が多量に出土している。一方、上半層はシルト層を主体とするが、ほとんど遺物は出土していない。

- 第1遺構面** 確認できた遺構には、土器棺墓1基、掘立柱建物1棟、溝状遺構2条、石組井戸1基のほか、落ち込み2基やピットなどがある。
- 鎌倉時代前半** 直径0.36m、深さ0.20mの円形のピット内に甕を正位置で据えたもので、壺形土器の底部で蓋をしているが、蓋の頭部は完全に削平されている。甕内部の堆積土は水洗選別を行ったが、出土遺物はない。
- S T101** 幅1m前後、深さ0.50mの断面U字形の溝状遺構で南北方向を指向する。埋土は灰色系のシルト質細砂或いは極細砂～細砂を主体とし、弥生時代中期の土器・石器が出土した。
- S D102** 最大幅2.8m、深さ0.70mの溝状遺構で、2段に掘り込まれている。埋土は7層に分けられ、最下層の青灰色砂礫から5世紀末～6世紀初めの須恵器とともに、槽と考えられる木製品片1点が出土している。上層部埋土からは弥生時代中期の土器に混じって6世紀末の須恵器が出土している。

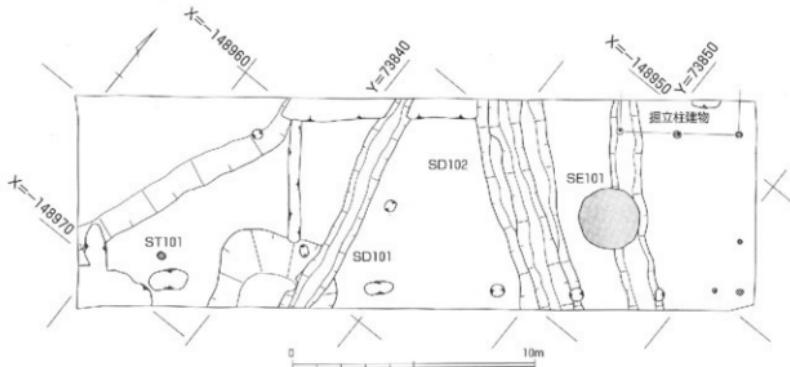
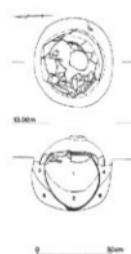


fig. 121 第1遺構面平面図



fig. 122 S T101断面



1 暗褐色シルト質細砂～細砂  
2 淡黒褐色粗細砂質シルト  
3・4 暗黄灰色シルト質細砂  
5・6 暗灰褐色シルト質細砂～細砂

fig. 123 S T101平面図・断面図



fig. 124 SE 101断面

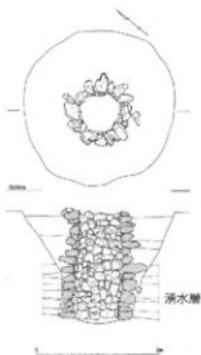


fig. 125 SE 101平面図・断面図

**SE 101** 直径2.5m、深さ1.8mの円形の掘形に、内法直径55~60cmの石積みの井側を設置したものである。石材はすべて花岡岩礫である。井側内には人頭大の礫が多数落ち込んでいたが、出土土器はなく、わずかに柾目の板材の小片が出土したのみである。

掘形が検出面の上層に堆積した14世紀前半を上限とする旧耕土層を切っている点から、かなり新しい時期のものと考えている。

**3. まとめ** 今回の調査では、少なくとも4時期にわたる遺構面が確認でき、さまざまな遺構・遺物が確認できた。

弥生時代前期後半では、遺構にはそれほど恵まれなかったが、貯蔵穴を想起させるような土坑を含んでおり、集落の縁辺に近づいているのかもしれない。流路様の落ち込みをはじめとして、出土土器は完形品を含み、多量である。

弥生時代中期では、遺構頻度が最も高い。竪穴住居も確認されていることから、今回の調査地点付近まで生活域が拡がっていることが確認できた。多量の弥生土器とともに、磨製石包丁や磨製石斧などの石器類も出土している。

弥生時代後期では、3棟の竪穴住居が確認できた。各住居の位置関係は、SB 201とSB 202は約2m、SB 201とSB 203は約9.2mの間隔であるが、各辺の方向性もそれぞれ異なり、他の遺構との切り合い関係など、出土土器の検討による各遺構の細かい時期比定の作業が必要であろう。

古墳時代前期以降では、さまざまな時期の遺構が同一面で確認されている。SD 101は弥生時代中期を中心とした土器が出土しているが、SD 102とは方向性が異なることから遺跡を削りながら流下する古墳時代後期以前の溝状遺構である可能性がある。

以上のように、戎町遺跡はかなり長期間にわたって遺跡が営まれてきたことが今回の調査でも立証された。出土した遺物の量も多く、今後の課題は山積している。これまでの調査件数も増加してきており、何らかの形で、これまでの発掘資料を整理する段階に至っている。

## 25. 行幸町遺跡 第1次-1・2調査

### 1. はじめに

六甲山を背にした神戸の市街地は、大阪湾に面した山腹の山麓扇状地が細長く東西に連なる傾斜地上に発達してきた街である。この六甲山塊と大阪湾に挟まれた陥狭な平野を南北に刻むように六甲山を源とする河川が大阪湾に流れ込み、海岸平野を形作っている。行幸町遺跡は、この海岸平野の西端、都市河川千守川が作る複合扇状地の中央、海岸段丘崖に接する傾斜地上に位置し、標高15m～17mに占地している。

今回の調査地の北側には、近世の西国街道が東西に通り、現在の歴史地理学の見解では古代の山陽道もほぼ同じルートを通っていたと推定され、今回の調査地においても、なんらかの古代山陽道側溝等の痕跡が発見されることも想定された。

今回中央幹線街路築造工事の計画が天神町4丁目の東に策定されるに至り、平成12年5月に試掘調査を実施した結果、行幸町4丁目の計画予定地ほぼ全域に遺物包含層と遺構が確認された。今回第1回目の調査では、当初天神町遺跡の東限を明確にすべく、天神町遺跡第4次調査として実施したが、検出した遺構が飛鳥時代～奈良時代・中世におよぶ溝等の遺構であったため、従来の天神町遺跡とは遺跡の性格が明確に異なり、調査地の地名を探って行幸町遺跡とした。

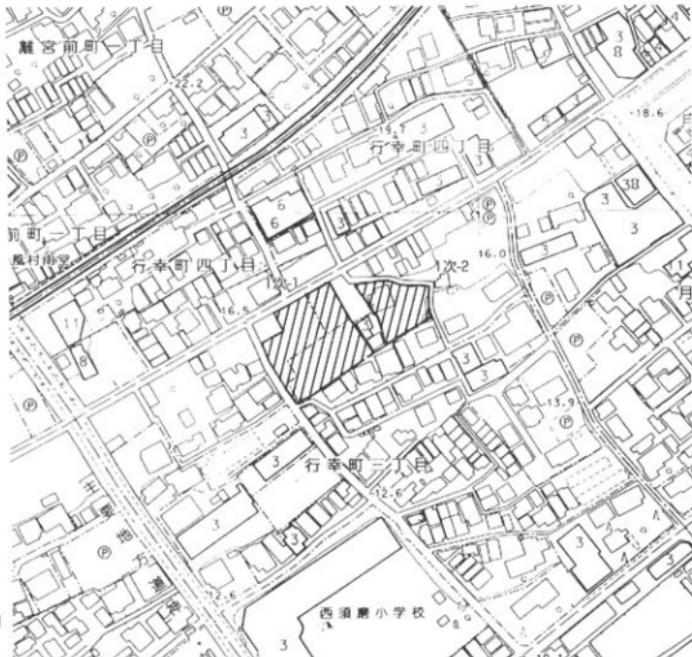


fig. 126  
調査地位図  
1 : 2,500

2. 調査の概要 第1次-1調査は、最初に道路敷き部分（A地区）から実施し、代替地予定地（B地区）第1次-1はA地区の調査完了後、反転して調査を実施した。第1次-2調査は調査予定地内の民家移転後の平成13年1月から実施した。

A区 基本層序 調査地の基本層序は、盛土・攪乱層下に近世から近代の耕作土、耕作土下に中世の遺物を含む灰黄色細砂がほぼ水平に堆積し、その下に調査区の南側では暗灰色細砂、北側では暗黃灰色細砂と暗灰色中砂・灰黄色中砂等が互層に堆積し、暗灰色中砂内から開元通寶が出土した他、微量ではあるが奈良時代の須恵器片が出土している。遺構はこの奈良時代の遺物を含む堆積層の下、南部では淡灰色粗砂、北部では灰色系のシルト及び中砂の互層面に掘り込まれて検出された。この遺構面上では概ね3条の南北に流れる自然流路の痕跡が検出されたが埋没土からの出土遺物は無く、流路の埋没後に遺構が掘り込まれていた。

第1遺構面 検出遺構は溝4条、土坑5基、掘立柱建物1棟、性格不明遺構1ヶ所及び河道である。なお、SD02はSD03の埋没後に開削されており、SD03が攪乱坑の清掃の際深く掘り込まれていることが明確であったため、SD02とSD01を第1遺構面として検出し、他の遺構を第2遺構面として記録処理して調査を進めた。

SD01 調査区北部を東西に走る直線的な溝である。幅50cm、深さ30cm前後の断面U字形の素掘り溝である。埋土は暗灰黄色細砂で、円礫を多量に含み、上層部から近世の陶磁器が多く出土した。

SD02 調査区中央部を東西に走る直線的な溝である。溝の東部はSD03の埋没後に掘り込まれ



fig. 127 第1次-1 A区第1遺構面全景

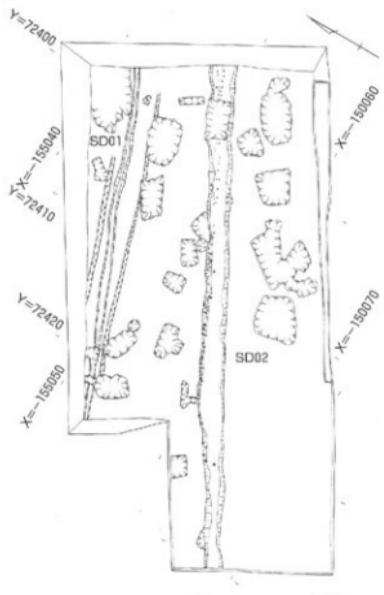


fig. 128 第1次-1 A区  
第1遺構面平面図

ている。幅は調査区東端で2.2m、中央で1.8m、西端で1.4m、深さ40cm前後が計測する。断面形は浅いU字形で、溝の北側肩沿いに直径10cm～20cm前後の杭列が2列～4列交互に検出された。柱穴内には木杭が一部で残存していた。溝の埋没土内からは僅かではあるが奈良時代の土師器碗片・須恵器坏身・蓋片などが出土している。

**第2遺構面** 調査区中央部をやや湾曲して掘られた溝をS D03として検出し、西側ではS D03に取り付く直線的な溝S D04を検出したが、両溝は埋没土が同質であり、一連の溝として継続すると考えられる。

**S D03** S D03は現状での検出状況では、2段に掘り込まれた素掘り溝で、肩崩れを起こしながらも中段に幅0.5～1.5m前後の犬走り状の平坦面を一部で残している。また、溝の北岸では幅80cm～90cm前後、深さ20cm程度の溝の中心に直交する落ち込みが2ヶ所溝肩の傾斜に沿って掘り込まれていた。落ち込みの埋土はほぼ溝埋土と同様な黒灰色極細シルトで、埋土内からは出土遺物は検出されなかった。溝の規模は調査区東端上端で幅6.0m、中段で幅3.2m、深さ1.2m、調査区中央東部で上端4.0m、中段で幅3.0m、深さ1.1mを計測する。S D03の断面形は両肩に平坦面を作りつける台形状に作られる。S D03は東に行くに従い深くなり、幅を広げるものの、中段での溝の幅は3.0m前後と開削時乃至は使用時の幅を残存させているものと推定され、犬走り状の平坦面は作業通路として用いられたと考えられる。

溝下層部の埋没土は淡黒灰色砂質シルトと乳灰色中砂が一機に堆積し、その上面では、木簡片や及び奈良時代の須恵器坏蓋が出土している。また、底部付近からは飛鳥時代の須恵器片や性格不明の木材片が出土している。

**S D04** S D04は調査区西部でS D03との取り付き部から西へ5mの範囲で検出し、調査区の北西側は既存建物のため調査区外となり、北側肩が検出できない約12mについては調査を実施せず遺構面での検出に止めた。溝の幅は2.9m、深さ1.1m前後の断面U字形で、埋土はS D03同様に下層で淡黒灰色砂質シルトと乳灰色中砂が一機に堆積し、埋土内からは飛鳥時代の須恵器・土師器が流木と共に出土している。S D04はS D03よりやや西南に直線的に延び、断面形もU字形で形態もS D03とは異なるが、切り合いは認められず、堆積土の状況も同様であることからほぼ同時期に開削されたと想定される。

**土坑** 土坑は全てS D03の北側で検出した。規模は最大でS K02の長径2.05m、最小がS K01の長径0.8mである。S K01は調査区東端、緑灰色シルトから掘り込まれた梢円形の土坑で微量ではあるが須恵器・土師器が出土した。S K02は南北に長い不整梢円形で、北西肩部上層で土師器壺1個体・蛸壺が検出され、須恵器坏身片が底部から出土した。いずれも飛鳥時代～奈良時代に比定されるものである。この他、S K03・04の埋土内から土師器片が出土している。

**S B01** S B01はA区西部南端及びB区西部北端で検出した掘立柱建物である。南北3.0m、東西6.6mの2間×2間の規模で北東の隅柱を欠く。柱間隔は南北で1.5m等間、東西で西から2.5m、3.1mを計測する。柱掘形は一辺が60～80cmの方形で深さ40～20cmを計測し、一部の柱掘形では柱痕跡が明瞭な他、抜き取り痕跡も明瞭である。掘形内からの出土遺物はない。

**ピット** 調査区西部とS D03・S D04の北側で検出されたが、深さ10～20cm前後と浅く、建物等にまとまるものがなかった。



fig. 129 第1次-1A区第2遺構面全景

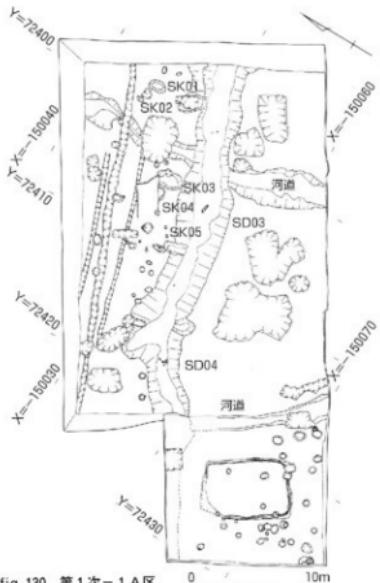


fig. 130 第1次-1A区  
第2遺構面平面図

**S X01** 調査区西部で検出した長方形の落ち込みである。北西側はSD02によって破壊され落ち込みの下場を痕跡のみ残存させる。落ち込みの規模は南北7.0m、東西5.0m、深さ16cmを計測する。落ち込み掘形はほぼ垂直に掘られ、下部に幅10cm、深さ5cm前後の溝が巡る。掘形底は平坦で、埋土はレンズ状に堆積するが、遺物の出土はなかった。掘形底では3基のピットが検出されたが、上層から掘り込まれたものか、掘形に伴うものか明確でない。以上の検出状況から堅穴住居址が削平を受けた痕跡とも考えられるが、明確でない。

**B 区**  
**基本層序** 調査区の基本層序は、盛土・近代耕土・旧耕土・床土の順に堆積し、旧耕土・床土直下に調査区の東半では灰色シルト、西半では黄褐色シルト質細砂の基盤層が検出される。西半部西半では黄褐色シルト質細砂上面で鉤状に走る溝5条と柱穴群を検出した。東半では河道2条及び近代の耕作溝数条を検出したが、その基盤層となる灰色シルト系の粘土層は西へ行くに従い黄褐色シルト質細砂の下に潜り、平面U字形の谷地形を調査区南西部に形成する。谷の埋没土からは飛鳥時代～中世の遺物が出土し、中世の早い段階には現在の地形に近い緩やかな傾斜面が形成されていたと考えられる。

**第1遺構面** 调査区南西部ではほぼ並行に鉤状に巡る溝5条を検出した。幅は最大でSD06の80～50cmで、最小はSD09の30cm前後である。深さはSD05で5～15cm、SD06が15～30cm前後、20cm前後のものが多い。とともに断面U字形の素掘り溝で、出土遺物はなかった。

**溝** ピットは調査区西部の溝列周辺、A区から続く北西部の高台部分に検出された。北西部高台の東側の1基は一辺50cm大の掘形方形でSB01に付属する。須恵器片が出土した。

**ピット** 小 結 今回の調査では、調査区の北半A区で出土遺物から7世紀後半に掘削され、奈良時代に



fig. 131 第1次-1 B区全景

fig. 132 第1次-1 B区  
調査区平面図

埋没した大溝 S D03・04、大溝埋没後の奈良時代に設けられた東西直線の溝 S D02を検出した。この内溝 S D02は北側肩に土留めと考えられる杭列が検出され、北側に盛土等何らかの造成がなされていたと考えられる。今この直線的に東西に延びる溝の北側に道路に伴う盛土造成が行われたとすれば古代山陽道の南側溝と想定できる。また、今までの他地域で検出されている古代山陽道の道幅12~13m、側溝幅約2.0mを考慮すれば、その幅1.4~2.2mは概ね相当し、北側溝は現西国街道の下に想定できよう。さらに、S D02の北側にはほぼ並行して掘られたS D01も埋没時期が近世前期と考えられるが、駅路は平安時代～中世には6m前後と幅を縮減されることから、道路側溝の可能性も考慮できよう。いずれにせよ、須磨駅家と考えられる大田町遺跡で検出された平安時代の山陽道側溝との位置関係等を検討し、今後の調査に留意していく必要がある。

大溝 S D03・04は発掘調査地の等高線にはほぼ並行に穿たれ、南西方向に傾斜する地形に直行して掘削されており、人工的な水路であると考えられる。大溝の時期は、溝底より飛鳥時代（7世紀）後半の須恵器・土師器が検出され、奈良時代（8世紀）前半には底部が埋没して木簡・須恵器等が廃棄されている。大溝は北西から南東に流れ、その取水は現在の千守川水系であった可能性がある。古代から流路の短い暴れ川の多い神戸市域では、このようにして比較的小河川から取水して、水利の少ない平野を開墾していくと考えられる。また、この大溝が穿たれた7世紀後半は、機内大和・山背・河内においてそれぞれ大溝が掘られたことが記紀に記されており、文献に表れない大溝掘削による開墾事業がここ須磨の地で展開されたことを示す遺跡として今後検討が必要である。

第1次－2 今回の調査地は第1次－1調査地の東に近接する。

調査の結果、第1次－1調査で発見された「大溝」の延長部分や、掘立柱建物の柱穴、小溝などの遺構が確認された。

**基本層序** 本調査区は、北から南へ下がる山麓の斜面地形上に位置する。調査区内に堆積していたのは、現在の地表面から標高14.50mまでの間は現代～中世の耕作土（田圃の土）である。これらの新しい層をすべて取り除いたところで、奈良時代の土器が多く含まれた遺物包含層が現れる。ただし現代の田圃が地形を利用して段に造られていたため、調査区のほぼ中央を東西に横切るように、南が低い段状に整地された痕跡が標高14.50m付近まで残っていた。この整地のため遺物包含層は段の低い方、調査区の南西部にだけ残っており、北半では整地によって削られてなくなり、旧耕作土の直下で遺構面となる。南東部については、整地が遺構面まで達していたため遺構面までも削られていた。

遺物包含層は、現在の地表面から150cm程度掘り下げ、標高14.50m付近まで到達すると現れる。遺構面はその直下標高14.10m付近の地山層である。

今回の調査で確認された遺構は、第1次－1調査で発見された「大溝」の延長部分や、掘立柱建物の柱穴3ヶ所、小溝3条、機能不明のピット多数などである。大溝は調査区の北端で確認されたが、その他の遺構については南側に多く集まっていた。

**大 溝** 調査区の北端で確認された、東西方向に走る幅約2m、深さ約6mの大きな溝である。  
**(S D01)** この溝は調査区の北辺にほぼ平行に東西方向に走っているが、調査区の東端で北へ90度に近い角度で曲がって、調査区外にのびている。今回の調査区がちょうど溝の屈曲部分までのため、溝全体が北に曲がっているのか、一部北へ支流が派生していて、本流はさらに東へ続いているものなのかは確認できなかった。第1次－1調査でも、ほぼ同じ標高地点で同様の大溝が確認されていることから、両者は同一遺構であり、溝は第1次－1調査地から今回の調査地まで横断し、さらにその西および北方向に伸びる大規模な構造物であると考えられる。

この溝は、断面形が緩やかなV字状を呈している。溝内には底から1m以上の厚さで黒色の粘土層が幾層も堆積しており（下層）、その上に褐色の砂層（中層）、さらにその上には灰色粗砂層（上層）が堆積していた。上層からは中世～奈良時代までの幅広い時期の土器片が出土している。中層からは8世紀のものと思われる土器片が、下層からは奈良時代から一部飛鳥時代と思われる土器片が木製品などと一緒に出土している。特に飛鳥時代の土器片については、数はわずかだが溝の底に近い位置から出土しており、この溝が造られた時期は飛鳥時代まで遡る事を示している。

上層の粗砂層については、幅広い時期の土器が同時に出土しており、また堆積の状況からもこの層は溝が完全に埋没して機能しなくなった中世の時期に、溝の痕跡である低い部分に堆積した二次的堆積層と考えられる。

中層については、溝の最終堆積層と考えているが、堆積の状況から比較的短時間に堆積したもの可能性が高い。この層から8世紀の稜碗が2点出土している。稜碗とは、銅製の碗の形を模して作られた須恵器で、官舎、寺院など、当時の社会的上層階層社会で使われたものであると考えられている。



fig. 133 第1次-2調査区平面図

下層の黒色粘土層は、何層もの薄い層が數十層連続したものだが、この複数の堆積層について、3つのグループに大別することができるため、調査時は下層第1層、下層第2層、下層第3層として区別した。飛鳥時代の土器が出土するのはこの下層第3層、もしくは溝の底面のみで、下層第1、2層からは奈良時代の土器（8世紀）だけが出土する。このことから、飛鳥時代に作られたこの大溝が、奈良時代まで継続して使われ続けた可能性が高い。

また、下層第2層まで掘り下げた時点で、溝の屈曲部分に近い位置に造られた小規模な「しがらみ」（木で組んだ堰）を確認した。しがらみはほとんど崩れており、造られた当時の原位置を保っていたのはごくわずかであったが、残っていた部材の状況から見て、自然木の先を鋭利な刃物で削って尖らせ、杭状に加工したものを見数本溝の方向と直交するように溝内に打ち込み、それに板材をあてて横板として溝の流れをとどめる簡単な構造であったようである。発見時に原位置に残っていたのは、直径が10cm未満の杭が3ヶ所。これは一列に並んで打ち込まれている。また、若干動いてしまっているとは思われるが、その杭

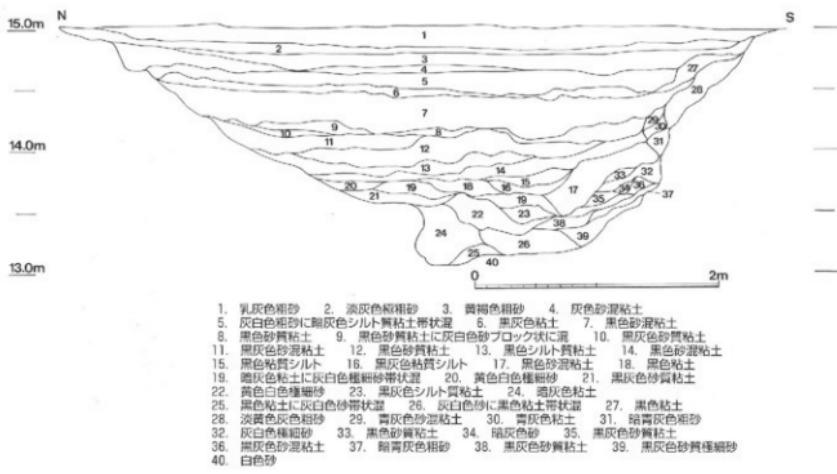


fig. 134 大溝土層断面図



fig. 135 大溝全景



fig. 136 大溝内遺物出土状況

に渡すように横板が1枚、また板と杭の間には、多くの未加工の細い木の枝が、板と同じ方向に並んで発見されていることから見て、これらも何らかの役割があったものと考えられる。しがらみが西からの流れを受け止めるように造られている点から見て、溝の流れは

西から東方向へ水が流れていたと考えられる。

しがらみの周りには、小枝や杭など人為的に加工された木材の破片、杭を加工する際に出た木の削りかすなどが多量に固まった状態で出土している。削りかすが多く出土したことから、このしがらみを造った人物は現場に手頃な太さの自然木を持込み、その場で加工したものと思われる。土器片や銅製の帶金具（ベルトのバックル）が、しがらみの部材の間から挟まった状態で出土しており、しがらみが使われていた当時のものと考えられる。また、溝の底からは木製品が数点出土している。機能不明のものがほとんどだが、1点だけ、高床式建物の階段（梯子）であるとわかるものがあった。上記のしがらみが、溝が造られてから一定期間たち、ある程度溝が埋まり始めた奈良時代に造られたものであることは間違いないが、この梯子については、溝が造られた当初のものである可能性が高く、その時期は飛鳥時代の可能性がある。

溝の形状と流れの方向から、これが自然河川でないことは確実であるが、この大溝が何のために造られたものかを直接示す証拠となるようなものは、今回の調査では出土しなかった。溝の埋土である連続する黒色粘土層の堆積は、溝が機能していた当時、その流れがよどんで緩慢なものだった事を示しているが、可能性としては、用水路または何らかの区画のための濠などが考えられる。

区画のための濠であれば、溝が北側に屈曲していることから見て、今回の調査地より北側に、濠で囲むべき施設の存在が予測されるが、しがらみの存在はどちらかというと水路的な機能があったことをにおわせる。

また、溝が飛鳥時代に造られ、奈良時代まで使われつづけたとすれば、百数十年の間機能しつづけたことになる。しかし施設を囲う濠であれば、施設もその間存しつづけたことになり、若干仮説には無理があると思われる。

一方、しがらみの構造から流れは西から東へ向かっていたものと考えられるが、東の突き当たりで標高の高い北に向かって屈曲する構造は、大量の水を流す用水路としてはやや不自然な構造である。濠、用水路どちらの可能性も現時点では残されており、今回の調査で確認できた範囲では、溝の機能について確定できるだけの情報は収集できなかった。

**掘立柱建物** 掘立柱建物の柱穴と考えられる3ヶ所の遺構が、調査区南端で一列に並んで発見されている。これらの遺構は直径70cm～90cmで、深さはそれぞれ異なるが、埋土の状況、配列などから建物の柱穴と考えた。建物は調査区より南側に続いていると考えられる。これらの遺構内からは、ごく小さな遺物しか出土していないが、遺構の真上に堆積していた包含層が奈良時代であることから、奈良時代かそれ以前の可能性が高い。

**ピット** 今回の調査では、大小多数のピットが確認されている。互いの配置が不規則で、掘立柱建物の柱穴と証明できるものはなかったが、埋土の状況から柱痕の確認できたものも数ヶ所あった。ピットの埋土の状態は大きく2つのパターンに分けられる。包含層と近似の、褐色粘土の単層もの、黄灰色砂層や灰色極粗砂など、複数の土質の層で構成された複雑なもの2種類である。これらは、時期に差があるものとして捉えているが、上述の掘立柱建物の柱穴については、後者のパターンの埋土である。ほとんどすべての遺構からの出土遺物が極端に小さな破片で、時期が判別できないほどであるから、これらの遺構の正確な

時期差について証明することはできない。ただし、一部時期の分かるものには、中世の遺物を出土しているものがあることから、今回同一層の上面で確認した遺構は、中世から飛鳥時代までの複数の時期のものがあることから、今回同一層の上面で確認した遺構は、中世から飛鳥時代までの複数の時代のものが共存している状態である可能性が高い。

S D01 上記の大溝以外に3ヶ所細く浅い溝も確認している。いずれもその機能は不明である。

S D01と呼んでいるものは、調査区南西側で確認した。幅30cm、深さ10cm、調査区内で確認した限りでは、長さは10m以上である。西端は調査区より西側に続いており、東端は調査区の中央付近で、現代の整地によって削られ、なくなってしまっている。

S D02 S D02と仮称したものについては、S D01とはほぼ同じ方向に、S D01と重なり合って確認されている。互いの重なり具合から見てS D02のほうが後の時期に作られたものだと分かるが、幅60cm、深さ5cmと浅く、長さは確認できた限りで2.5mと短い。両端が現代に搅乱されて失われてしまっているので、実際の長さについては不明である。

S D03 上記の2条の溝が、東西方向に走っているのに比べ、S D03はやや蛇行しながら南北に走り、北で大溝とぶつかっている。南端はピットの上に造られており、この遺構よりも新しい時期のものとわかるが、さらに南側は、現代の耕地によって削られ、なくなってしまっている。北端の大溝の埋土上には、溝は切り込んでいないことから、大溝と同時期、あるいはより古いことがわかる。

**土 坑** 3ヶ所確認されているが、どれも東西に長い楕円形で、埋土も比較的類似していることから、同じ機能のものかもしれないが、どれもほとんど遺物を出土しなかったため、時期は不明である。埋土は黒色粘質砂を基本としており、このような土質のものは、どのピットにも見られない、楕円形の土坑特有のものである。

**小 結** 今回の調査では、現代の地表面から約150cm掘り下げた地点、地山層の上面で遺構面を確認した。確認した遺構面は1面だが、そこに残された遺構は、おそらく中世から飛鳥時代と幅広い時期のものが混在していたと考えられる。地形が北から南へ下がる斜面地であったことから、遺構面は調査区の北側で標高14.7m付近、南側では14.1m付近での確認となった。調査地は現代の耕作地として整地されていたため、調査区南東部分では、遺構面が削られており、遺構の残りが悪い状態での確認となつたが、南西部については比較的良好で、多くの遺構がこの南西部で確認されたものである。

また、調査区の北端で、東西方向に走る幅6mの大溝を確認しているが、この溝の機能については現時点では不明確である。しかし、稜塊、帶金具、高床式倉庫の梯子など、社会的地位の高い存在をおわせるものが多く見つかっており、今回発見された大溝の近くに何かそういったもののが存在したと考えられる。

大溝は造られてから、埋没して機能しなくなるまで百数十年の永きにわたって存続していた可能性が確認されたこともあり、この遺構が溝、用水路のどちらであるとしても、その規模、特殊性は特筆すべきものである。今後調査の進展次第では考古学上第1級の発見になりうる可能性も多く含んでおり、今回の調査は多くの可能性をもたらしたと考えられる。当地区での遺跡の扱いに関しては、今後とも慎重かつ正確に執り行われるべきものである。

## たるみひゅうが 26. 垂水日向遺跡 第33次調査

### 1. はじめに

神戸市垂水区に所在する垂水日向遺跡は、昭和62年度の試掘調査ではじめてその存在が確認された。この遺跡は地理学的には、垂水区の東部を流れる福田川と天神川によって形成された沖積地に立地しているが、すぐ南は海岸線という海辺の遺跡である。遺跡は当初福田川が海に合流する河口付近、日向町一帯にのみ存在するものと考えられていたが、発掘調査の回数を重ねるにつれ、より西側の陸ノ町、神田町から天ノ下町にまでその範囲が大きく広がることが分かってきた。このことから特に、垂水日向遺跡の中でも西端部分にあたる天ノ下町付近を「垂水日向遺跡・天ノ下地区」として、呼び分けている。

これまでの調査成果としては、遺跡の東半にあたる日向町一帯で行われた調査によって平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物群や、縄文時代～古墳時代にかけての海浜地形などが発見されている。なかでも、縄文時代の木が洪水によってなぎ倒され、木の葉が当時の緑色のまま泥の中に封印された状態で大量に出土したことや、浜辺を歩く縄文時代の親子の残した足跡の発見などが大きな話題を呼び、以後縄文時代の遺跡として広くその名をしられることとなった。

一方西側の天ノ下地区では、これまでに行われた発掘調査では、日向町付近のような縄文時代の遺構・遺物の発見はなく、平安時代～鎌倉時代の遺構が多く発見されている。

今回の調査は、神戸市都市計画局による垂水駅前再開発事業の一環として行われる、駅前広場建設事業に伴うものである。



**2. 調査の概要** 今回の調査では、4時期の遺構をそれぞれ異なる層の上面で確認した。これらの遺構は基本層序 堆積層の下位のものから順に、①弥生時代後期・②古墳時代前期・③平安時代（12世紀初頭）・④平安時代以降の時期のものと考えられる。その他、調査範囲内の堆積層の状況から、若干の旧地形に関する資料が得られた。

調査地内の堆積層は、現代に入ってから多くの手が加えられており、互いの層序的な前後関係を読み取ることは困難な作業となった。特に東半の1～3区については、再開発事業着手前に建てられていた建物の基礎が深く、調査区東南部分を中心にその全範囲の1/3が破壊されて旧状をとどめてなかった。

基礎が深く穿たれていた個所については、堆積層は碎石に置換えられていて、その深さは考古学的堆積層を越えて、さらに下位の無遺物層にまで達していた。そのため偶然基礎が浅く、本来の層の残った部分が島のように、大きな攪乱の中に残された状態で発見された。調査区の西南角にも、わずかに残った部分が確認された。

この島状に残った部分については、他と隔離されているため、北側の広く残った範囲の堆積層との層序的前後関係を示す物理的な証拠を得ることができなかった。島状に残った部分を形成している層は、北側のものとは異なる性質のもので、その形成過程は明らかに異なっていると考えられるが、層位学的な手法によって前後関係を知ることは不可能である。遺構・遺物の確認された層が存在することから、北側の遺構との時間的な前後関係を推測するものである。調査区の西南角についても、同様である。

西側に独立している4区についても、1～3区とは異なる堆積状況を見せている。

最終的には、調査区全体を1～3区の北西部、同北東部、同南部（島状の部分）、4区の4つに大別する事とした。fig. 138の柱状模式図は、これら5つの堆積状況とその前後関係を模式的に示したものである。

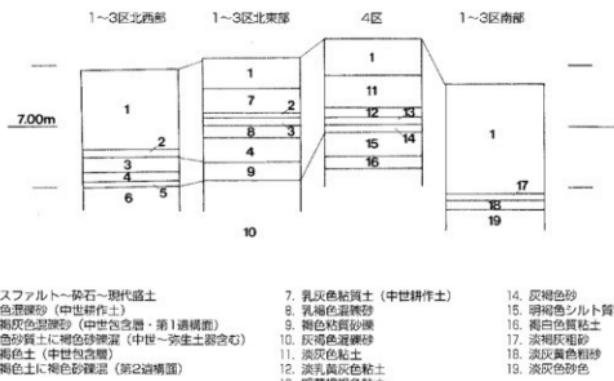
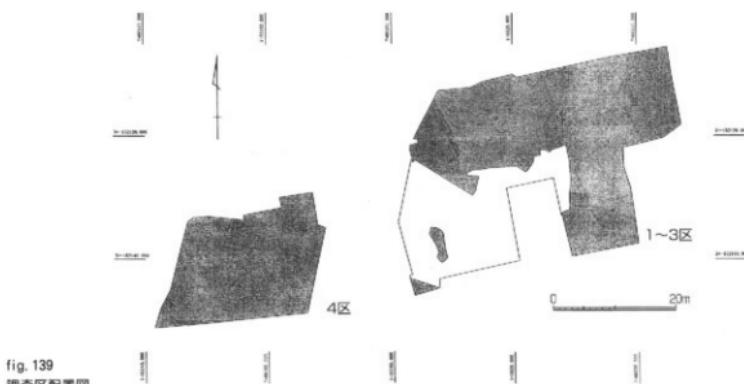


fig. 138 基本層序模式柱状図

fig. 139  
調査区配置図

**1~3区** 1~3区では、3時期の遺構面を、それぞれ異なる堆積層の上面で確認している。各遺構面の時期は、それぞれ平安時代（12世紀）より新しい中世のいくつかの時期、平安時代（12世紀）、弥生時代末である。

先述のとおり1~3区の約1/3は、本来の堆積層が破壊されてしまっており、北側に広い範囲で堆積層が残っていた部分と、南側の現代に擾乱されてしまった中で島状に本来の堆積層が残っている部分とに大別できるが、北側には中世の2つの異なる時期の遺構面2面があり、弥生時代末の遺構ではなく、南側では中世の遺構面ではなく弥生時代末の遺構面だけがあった。

**中世** 中世の遺構面は、1~3調査区の北西部で集中して確認されている。確認された遺構は長方形で埋土に多量の炭が混じった土坑（焼土坑）、溝などである。この長方形の土坑については、複数のものが互いに重なり合うようにして、確認されているものも多くあるが、全部で22ヶ所確認している。それ以外に埋土に炭が混じらない土坑を5ヶ所で確認した。溝については7条確認している。その他、ピットを2ヶ所で確認した。

**焼土坑** 全部で22ヶ所確認したこの土坑は、大きさや細かい形状はそれぞれ異なるものの、どれも楕円形のような長方形で埋土の堆積状況も同じ特徴で一致する。また、これらの土坑は例外なくその軸線がほぼ座標北に沿っていることから、一定の規格に沿って形成されて使用されたものであると考えられる。遺構の残存状態の良好なものについては、短辺の一方あるいは両方に一段深くなつたピットが付属していることも特徴として挙げられる。

先述したように、複数が重なり合っているものも多く確認されていることから見て、これらの土坑は、すべてが同時に造られ、使われたものではなく、時間差をもって造られたもので、ある程度時間をかけて、次第に土坑群が形成されたものと考えられる。

これらの遺構は、埋土の状況もほぼ一定で、上層は若干の炭が混じった土、中層はほとんど100%に近い状態の炭層、下層は焼土のブロック状になったものが混じった粘土層である。上層からは遺構面の下位の層から出土したのとはほぼ同じ時期の遺物が出土している。



fig. 140 調査地遠景

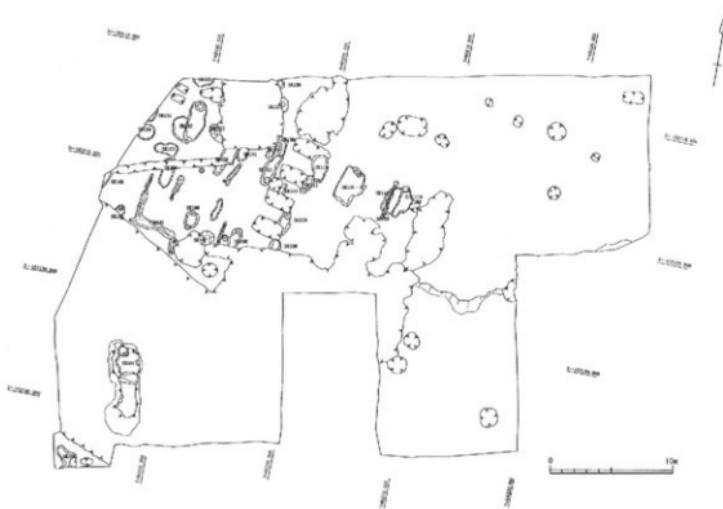


fig. 141 1～3区第1遺構面平面図

埋土の堆積状況から見て、中層、下層については遺構が機能していた時に生じた副産物による一次的な堆積層、上層については遺構が役割を終えて、すでに機能しなくなった後に堆積した二次的な堆積層であると考えている。

この遺構が何に使われたものであるかについては、直接的な証拠となるものが出土していないことから、推測の域をでる仮説は立てられない。炭・焼土からみて、土坑の中で火を焚いたものと考えられるが、土坑の底や壁面はあまり焼けておらず、その火はあまり高温ではなかったと想像される。これと同じ形の遺構は、市内の他の幾つかの遺跡でこれまでに多くの確認例がある。

## 溝

7条の溝のうち6条については焼土坑とほぼ同じ南北方向に長いものである。最も南寄りの1条だけが、東西に長い。どれも深さは10cmと浅く、長さも2ないし3m程度の短いものばかりで、遺物も細片が出土しただけである。SD103と番号をつけたものについては、焼土坑の上に重なって確認されていることから、焼土坑より後の時期に造られたものであることがわかる。これらの溝については、時期を示す遺物もなく、機能も不明だが、あるいは遺構面より上層で造られた耕作痕である可能性も考えられる。

## 平安時代

この時期の遺構面上では、掘立柱建物と思われる柱穴列を3ヶ所、その他配置が不規則で、用途不明のピットを多数確認している。

## 掘立柱建物

掘立柱建物については、どれも座標北よりわずかに東へ振れるという、ほぼ同じ方向に軸を向けて建てられている。3棟確認したうちの2棟については建物全体ではなく、その一部を確認したに過ぎない。

## SB201

調査区の北西隅で確認した。確認できたのは7ヶ所の規則的な配列の柱穴で、その配置から見て、建物は3間×2間以上の柱間をもつ構造であると推測されるが、今回の調査ではすべてを見出すことができず、正確な建物の大きさなどは不明であった。

## SB202

SB201の南側に位置する。確認できたのは6ヶ所以上の規則的な配列の柱穴で、建物の北の角部分である。建物は2間×3間以上の柱間をもつ構造であると推測されるが、その東半は現代に破壊されてしまった範囲に広がっていたため、残存していない。

## SB203

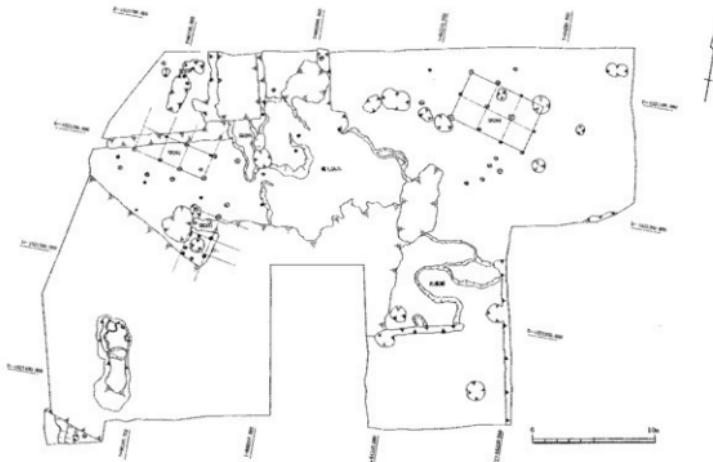
他の2棟からやや東へ離れた場所で確認した。11ヶ所の柱穴の配列から見て、3間×2間の柱間をもつ構造であると判明した。柱穴からは12世紀初頭のものと考えられる土器が出土しているが、これはこの建物が廃棄された後に、柱穴内部の堆積土に混入したものである。この建物の時期については出土遺物が示す時期と直上位の層に堆積している遺物の間に大きな時期差がないことから見て、ほぼこの土器の時期に近いものと考えられよう。

## ピット

掘立柱建物以外にも、複数のピットを確認したが、そのうち調査区の西隅で確認したSP229の底部からは、漁網につける土製の錘が2個、安置された状態で出土した。このピットは周囲に対になるものではなく、現時点では建物の柱穴である確証は得られなかつたが、出土状態から判断して、錘は人為的に置かれたものであり、建物の柱穴に対して行う「地鎮」の道具であると思われ、このピットは調査範囲よりさらに北側に広がっている建物の一部である可能性も高いと考えられる。

## 弥生時代

以上が、1～3区の北側で確認された遺構である。この範囲では中世の遺構面の下層に弥生時代の遺構は存在しなかった。しかし、1～3区の南側の、現代の建物で大きく堆積



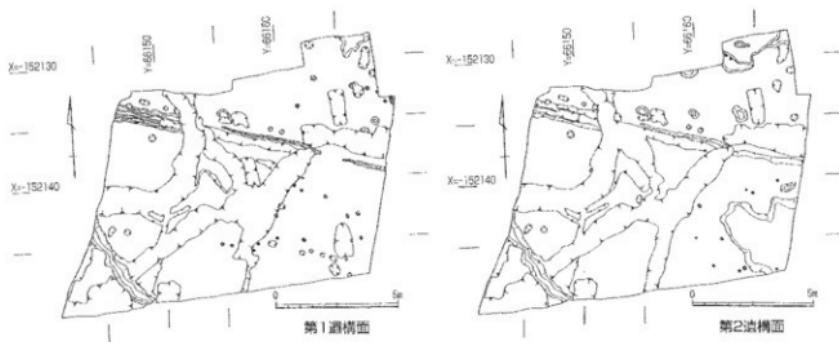


fig. 143 4区平面図

ピットについては、不規則な配置で、掘立柱建物の柱穴として確認できたものはなかった。S P103と番号を付けたものについては、埋土内から土師器の小皿が安置した状態で出土した。

土坑はどれも不定形な形状のもので出土遺物も少なく、機能が分かるものはなかった。全部で3条確認された溝は、どれも東西方向に走る細く浅いものである。S D101と番号を付けたものについては、調査区の東端から西端まで続いているが、それ以外のものは調査区の西側に重なり合うような状態で見つかっている。出土遺物は少なく、あるいはより新しい時期の耕作溝が下層まで達しているものである可能性が高い。

**古墳時代** 古墳時代の遺構は、溝1条、土坑、ピット、正確な機能の分からぬ不安定な落ち込みが1ヶ所である。

溝は、調査区西南角で確認されたもので、幅約100cm、深さは約25cm、断面はV字に近い形状である。長さは本調査区で確認されただけでも8mになるが、さらに南側に伸びて調査地の外側まで続いているため、全長や全体の形状は不明である。

過去に本調査区の西隣が、民間の遺跡調査團によって発掘調査が行われた際に確認されて、古墳時代前期の溝として報告されているものと同一の遺構であると考えられる。

土坑のうち、S K204と番号を付けたものについては、調査区の北端で半部だけ見つかっている。残りの部分は調査区の外に続いている。見つかった範囲は、径が約150cm、深さは20cm程度の円形である。

S K202は不定形で、深さは10cmと浅い。

ピットは互いに不規則な配列を呈し、掘立柱建物などの柱穴である可能性は低い。

**3. まとめ** 今回の調査では、2ヶ所の調査範囲で弥生時代末（庄内式期）、古墳時代前期、平安時代（12世紀初頭）、中世の4つの時期の遺構面をそれぞれ異なる堆積層の上で確認した。

東側の調査区（1～3区）では、弥生時代末（庄内式期）、平安時代（12世紀初頭）、12世紀初頭より新しい中世の3つの時期の遺構面を確認したが、古墳時代前期の遺構は存在しなかった。西側の調査区では、平安時代（12世紀初頭）と、古墳時代前期の遺構面を確

認したが、12世紀初頭より新しい中世と弥生時代末（庄内式期）の遺構面は存在しなかった。

西側の調査区については、東側のような12世紀初頭より新しい中世の遺構が、本来はこの場所まで分布していたが、現代の田圃を造る際に削られて失われたために、今回の調査では確認されなかった可能性が高いと考えられる。

東側の調査区では、古墳時代前期の遺構は存在しなかったが、平安時代（12世紀初頭）の遺構が造られている層自身からは、微量の古墳時代前期の遺物が出土していた。この遺物包含層は西側の調査区でも確認されており、東側の調査区の途中で収斂されてなくなっている。この時代の遺構の分布は、西の調査区付近がその東限となり、より西側に広がっていたもので、今回調査した東側の調査区は、古墳時代前期の遺跡の範囲から外れる線上付近に該当するものと考えられる。

弥生時代末（庄内式期）の遺構については、ごく一部を東側の調査区で確認したが、大半が現代の地層が攢乱された範囲であるため、詳細は不明となった。西側の調査区では、古墳時代前期の遺構面が地山層の上に作られていたことから見て、それよりさらに下層は存在しないことがわかるが、東側の調査区の北半部でも、弥生時代末（庄内式期）の遺構面となる堆積層は、サブトレンチ等による観察の結果、存在しないことが判明している。また、今回の調査範囲のうち、東端部分については土石流や氾濫等の自然堆積作用によって、何層にもわたって礫層の堆積する氾濫原状の様相を呈している。この範囲でも弥生時代末（庄内式期）の遺構面は確認されなかったことから、この時代の遺構は今回の調査範囲よりも南側に広がるもので、北、西、東には分布域は拡大しない可能性が考えられる。

現在「たるみ銀座商店街」とよばれる商店街が、本調査区の東側を南北に通っている。この付近については、従来、谷地形に北側の山からの自然堆積による礫層が堆積している範囲で、居住範囲からは外れていると指摘されてきた部分である。今回の調査では、その予測の根拠となる自然堆積による礫層を確認したが、礫層は古墳時代以前から何度も堆積を繰り返し、平安時代（12世紀初頭）までにはほぼ谷が埋没し、現在の地形に近い状態まで変化していたことも確認した。平安時代（12世紀初頭）にはほぼ水平地形になったこの場所には、掘立柱建物などの家屋が建てられていた。この時代の遺構からは漁網につける鍤を使って、地鎮のまつりを行った痕跡が確認されており、集落の住人は漁労関係者である可能性が高いが、目の前が海という遺跡の地理的環境からも自然な結論である。従来遺跡の範囲外と考えられていた礫層上にも、平安時代（12世紀初頭）の遺構が分布していることは、今後遺跡の範囲を判断する資料のひとつとすべきであろう。

## かん ぶう 27. 寒鳳遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

寒鳳遺跡は、伊川と明石川との合流点付近の河岸段丘上に位置している。平成7年度に共同住宅建設に伴い最初の調査が行われ、平安時代の建物跡などが検出された。平成8年度に玉津・鳥羽線建設に伴い第2次調査が行われたが、第1次調査とは異なり、古墳時代後期の住居跡が数多く検出された。住居跡の中には『大壁造り建物』と呼ばれる渡来系氏族の集落によく見られる住居があり、寒鳳遺跡も渡来系氏族の集落と推定されている。その後も付近で調査が行われ、古墳時代後期の住居が発見され、当時の集落の状況が明らかになりつつある。



fig. 144  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴う調査で、平成10年度第3次調査の北側に位置する。調査区は1~3区と細分した。

今回の調査でも古墳時代後期の堅穴住居や掘立柱建物などが検出され、また遺物包含層から人形土製品が出土しており、当時の祭祀を考える上で貴重な資料が発見されている。

#### 基本層序

現地表面から①耕作土・②黄灰色弱粘質細砂〔旧耕作土〕・③暗灰茶色シルト質極細砂〔古墳時代後期遺物包含層〕・④茶黃褐色砂礫〔直径10cm前後の礫多い〕〔遺構面・地山〕の順で堆積していた。ただし、1区では遺物包含層はほとんど存在せず、旧耕作土の直下で遺構を検出している。

現地表面から③までは約20cm、また④までは約30cmである。

#### 検出遺構

今回検出した遺構は、堅穴住居10棟、掘立柱建物2棟、溝3条、土坑3基、ピット多数である。

#### 堅穴住居

今回検出した堅穴住居は表に示した通りで、以下若干の補足を加える。

S B03は、今回検出された中で最小のものである。北側では堆積が厚く、南側では削平が激しい。規模・堆積状況から住居とは考えにくく、倉庫のような建物と考えられる。

S B04は、今回唯一建て替えの行われた形跡のある住居で、東西方向の幅20cmほどの溝



fig. 145 調査区平面図

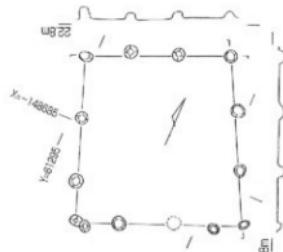


fig. 146 S B01平面図・断面図

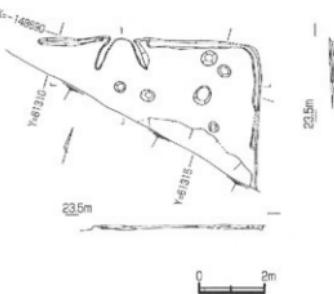


fig. 147 S B07平面図・断面図



fig. 148  
調査区東半部  
全景

	規 模	主柱	周壁溝	カマド	遺 物	備 考
SB03	東西3.5m・南北3m以上	2+	X	X	須恵器・土師器片	1区
SB04	東西・南北各4m以上	?	○ 幅40cm	X	須恵器・土師器片	2区 1度の建替あり
SB05	東西5m以上・南北7m	?	○ 幅20cm	X	須恵器・土師器片・菅玉	2区
SB06	東西・南北各約6.5m	?	○ 幅20cm	X	須恵器・土師器片	2区
SB07	東西6.5m以上・南北4m以上	?	○ 幅20cm	○	須恵器・土師器片	2区 築造以前にSK03あり
SB08	南北5m以上	?	○ 幅20cm	X	須恵器・土師器片	2区
SB09	南北1m以上	X	X	X	須恵器・土師器片	3区
SB10	東西・南北各1.8m以上	X	○ 幅20cm	X	須恵器・土師器片	3区
SB11	東西2.5m以上・南北3m以上	?	X	X	須恵器・土師器片	3区 包含層から人形土製品
SB12	東西2m以上	?	X	X	須恵器・土師器片	3区 包含層から人形土製品

が周壁溝と並行して検出され、規模や形状から住居拡張以前の周壁溝と判断した。

SB07は、カマドをもつ住居で、カマドは全長1m、最大幅50cm、床面からの高さ20cmの規模をもち、やや開き気味の馬蹄形を呈する。内部は若干オーバーハング気味で、上から焼土層・炭層・灰褐色砂質土の順に堆積している。焼土層・炭層からは、土師器・須恵器片が出土しており、またカマドの両端からは瓶の把手の部分が出土している。

**掘立柱建物** 今回検出した掘立柱建物は1区で検出した2棟で、SB02は2間×1間以上の規模で検出されているが、第3次調査と合わせて改めて検討するべき遺構であるため、今回は言及しない。

SB01は、1区中央で検出された3間×3間の建物である。1間は1.8m前後で、柱穴は直径30~50cm、深さ20~70cmで規模にはらつきがある。これまで検出された掘立柱建物とこれまでのものと方位も一致し、同時期の建物であったと考えられる。柱穴からは土師器・須恵器片が出土している。

**土坑SK03** 2区SB07内で検出された不定形な土坑である。検出長約4m、深さ23cmの規模で、埋土は大きく2層に分けられ、上層と下層の境から人形土製品が出土した。他の埋土からは土師器・須恵器片が出土しており、SB07とそれほど時期差はないものと考えられる。

**出土遺物** 今回も第2次調査の遺構と同様に、陶邑編年(田辺)のTK23~MT15型式までの須恵器とそれに伴う土師器が出土した。他に特殊な遺物として管玉と人形土製品が挙げられる。特に人形土製品は、神戸市内では寒風遺跡でのみ出土しており、第2次調査で1点、今回で4点発見されている。全国的にみると、静岡県や九州地方で比較的多く発見され近畿地方では発見例は少ない。今回出土したものは、「大」字形をしており、鳥取県倉吉市谷畠遺跡、大阪府四條畷市奈良井遺跡、三重県松阪市草山遺跡と類似した形態をしている。ただし、完形で出土したのは、遺物包含層・第2次調査SX01出土の2点のみであった。完形のもので全長8cm弱、最大幅5cm、胴幅2cm前後で、他のものも同サイズと考えられる。どの製品も手捏ねにより成形されており、その痕跡が観察できる。しかし、頭部・脚部などの各部位が欠損したり、激しい表面剥離を起こしており、良好な状態ではない。

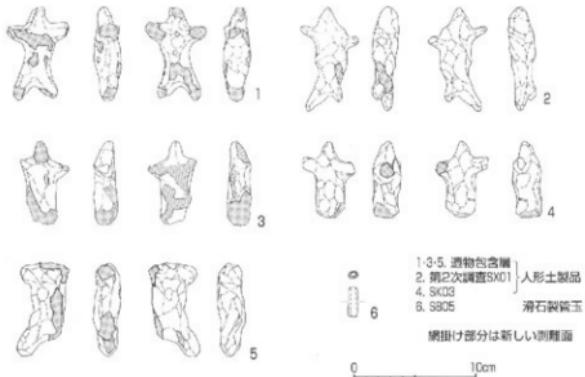


fig. 149 出土遺物実測図

**3. まとめ** 今回の調査では、多数の竪穴住居・掘立柱建物を検出し、住居の密接がさらに北に広がることが判明した。しかしながら造り建物のような特殊な遺構は検出されず、その分布は、南側、及び北側の第4次調査の行われた道路付近の2ヶ所存在するようである。大壁造り建物と関連して出土する遺物に韓式系土器があるが、今回も含めその出土は確認されず、この2者が必ずしもセット関係にあるのではない可能性を提示している。

また、今回は人形土製品といった特殊な遺物が計4点出土した。草山遺跡では方形台状墓、静岡県磐田市明ヶ島5号墳のような墓地や奈良井遺跡等のように馬形・器財形・手捏ね土器などが供伴して出土することから、祭祀遺物と捉えられることが多い。今回出土した人形土製品は、それぞれ他の祭祀遺物を伴わないので、どの様な形で使用されたのか不明なところが多い。

## にちりんじ 28. 日輪寺遺跡 第7次調査

### 1. はじめに

日輪寺遺跡は、西区玉津町小山に所在する弥生時代後期ないしは平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての集落遺跡で、明石川と榎谷川に挟まれた標高約30mの洪積台地の先端部に立地している。これまでに実施してきた6回の発掘調査では、弥生時代後期後半～古墳時代前期の堅穴住居が40棟確認されているほか、掘立柱建物・土坑・溝などの多数の遺構とともに多量の土器が出土している。また、第1次調査では平安時代前期の祭祀土坑も確認され、中世まで続くさまざまな遺構・遺物が確認されてきている。

今回の調査対象地区は第6次地点の西側に隣接している宅地造成工事の予定地で、昨年度からの継続である。なお、今回の調査については、既に平成13年度に『日輪寺遺跡発掘調査報告書』を刊行しており、本書では概要を記すに止まった。詳細については報告書を参照されたい。

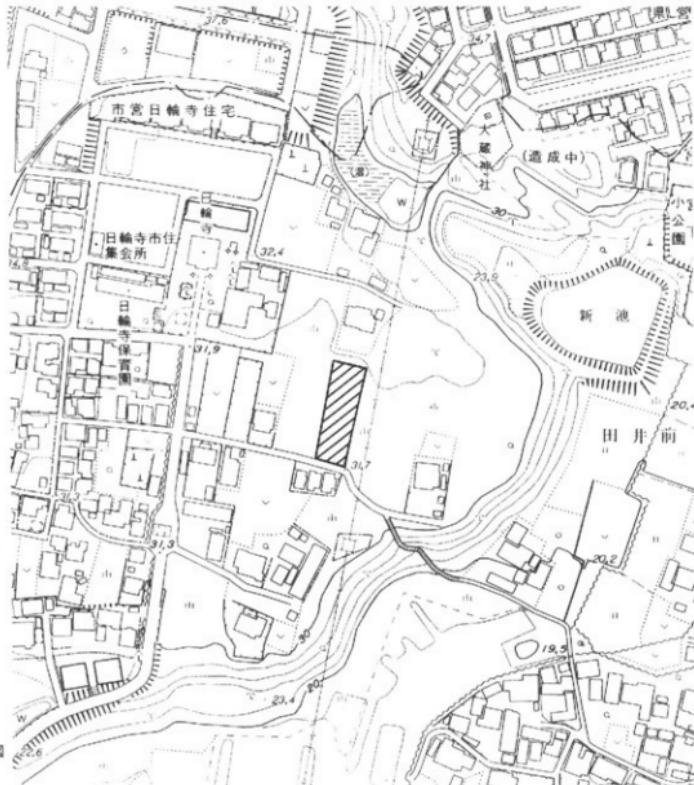


fig. 150  
調査位置図  
1 : 2,500



fig. 151 調査地全景



fig. 152 調査区平面図

**2. 調査の概要** 調査区の大半では、表土層直下で赤褐色疊混じり粘土の遺構面となり、一部では暗褐色

**基本層序** 砂質土の遺物包含層あるいは淡黄色砂質土の流土が確認された。

**検出遺構** 今回検出した遺構には弥生時代後期後半の堅穴住居3棟・土坑12基・落ち込み・ピットなど、時期不詳の風倒木痕と考えられる大型土坑9基、平安時代後期の木棺墓1基・掘立柱建物1棟、室町時代後半の塹1条、建物1棟などがある。

**3. まとめ** 今回の調査では、さまざまな遺構・遺物が確認できた。

弥生時代後期後半～古墳時代前期では、これまでの日輪寺遺跡の調査で約50棟に及ぶまとまった堅穴住居が確認されたこととなる。こうしたなかでも、今回確認できた堅穴住居3棟がいずれも大型の円形住居で、弥生時代後期後半に限定される点は集落の展開を考えていく上で示唆に富む。

また、平安時代後期では掘立柱建物に伴う木棺墓が確認でき、良好な状態で遺物がまとまって検出できた。

最後に、室町時代では中世の日輪寺に関連すると推定される遺構・遺物が確認できた。SD01の方向性は、現在の日輪寺の山門と本堂を結ぶライン( $N 8^\circ E$ )とは合致していないようであるが、中世の日輪寺の寺域を推測させる成果と言える。

## 29. いまづ 今津遺跡 第14次調査

## 1. はじめに

今津遺跡は、明石川と樺谷川の合流地点の東側に拡がる遺跡で、弥生時代の集落遺跡として周知されており、これまでに13次にわたる調査を実施してきている。今回の調査は第14次調査にあたる。

今回の調査は、住宅地内の街路築造に伴うものである。

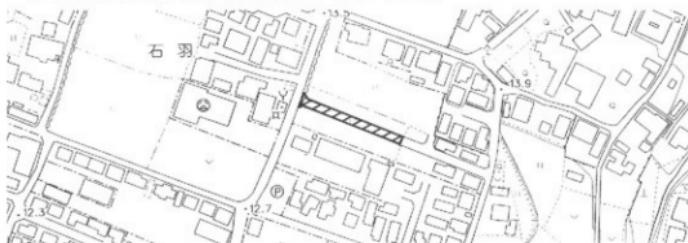


fig. 153  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

耕土・床土の下層20~30cmで遺構面を確認した。

遺構の密度は粗く、東半部で溝2条、西半部で溝2条をそれぞれ検出したに止まった。

SD01

西半部で検出した、幅25~64cm、深さは6~26cmを測る溝で、①区はやや直線的に南東から北西方向に流れるが、屈曲した後②・③区は円弧状に西に流れる。①区東端部はやや急激に屈曲して南に流れるようであるが、調査区外に延びているため詳細は不明である。①・②区の境界部分も北側が調査区外に延びる。③区も北側が調査区外に延びる。

あるいは、①区と②・③区で別個の遺構と捉えることも可能かと考えられたが、境界部分において切り合い関係が認められず、1条の溝と判断した。

遺構内からは庄内併行期頃の土器がまとめて出土している。これらの土器の大半は完形に近いものか、あるいは全体の器形がわかるほどの残りの良いものである。出土状況から考えると、これらの土器は流れてきたものというよりは、むしろその場に投棄されたような状態で出土しており、ほぼ原位置を保っているものと判断される。ただし、土器の表面は磨耗が顕著である。

この溝の正確については、現段階では不明である。削平を受けているため詳細は不明であるが土器がかなりまとめて出土していることから、単なる排水のための溝ではなく、祭祀が執り行われるような特別な性格を考えるべきであろう。

SD02

S D01の中央部の南側で検出した遺構で、溝というよりは、溝状の落ち込みとした方が妥当のような浅い溝である。遺物は出土していない。

SD03

調査区東半部で検出した、幅70~95cm、深さ19~23cmの遺構である。弥生土器と思われる土器の小片が出土しているが、磨耗が顕著で、詳細な時期決定は困難である。

SD04

S D03の東約4.5mで検出した溝で、幅40~55cm、深さ10~14cmを測る。遺物は出土していないため時期決定は困難であるが、埋土の状況から判断すると S D03と同様な時期の遺構と考えられる。

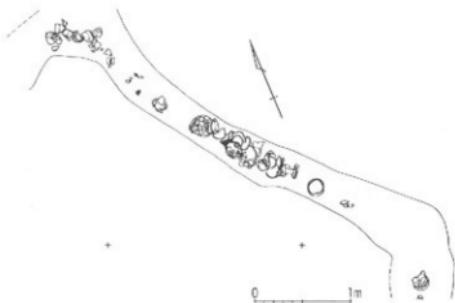


fig. 154 S D01-①区遺物出土状況図



fig. 155 S D01-①区遺物出土状況

なお、調査区の全般にわたって第1遺構面よりも下層に黒灰色シルト層が存在するが、この層位には弥生時代中期の土器片が含まれることが試掘調査の段階で判明している。東半部については、調査区中央に設置される埋設管の工事影響深度がこの黒灰色シルト層に及ぶため調査区中央を幅1mの範囲で深掘し、土器の詳細な出土状況について確認した。この結果遺物は少量出土するが、工事影響深度内において面的な拡がりは確認されなかった。西半部については工事影響深度がこの黒灰色シルト層に及ばないため第1遺構面までの調査に止め、下層の掘削は行わなかった。

**3. まとめ** 今回の調査では、検出した遺構の密度は粗いものの、今津遺跡の調査において初めて、庄内式併行期の遺構（溝）が確認された。この溝内からは、①、③区で多量の土器が出土し、完形に近いものも多い。土器表面は磨耗が顕著であるが全体的に遺存状況が良好で、溝の幅一杯に土器が出土している箇所もあり、その場に投棄されたものと判断される。溝の性格については、今後の整理作業を待って検討したいが、何らかの祭祀が行われた可能性が高い。溝の平面形が円弧状を呈するため、円形周溝墓の可能性も考えられるが、調査区内において主体部が検出されなかったため、現段階では断定できない。今回の調査では溝以外の遺構が検出されておらず、また前述のように今津遺跡内全体においてもこれまでに当該期の遺構が検出されていないため、居住域などについても全く不明である。よって祭祀を行った主体者がどこにその基盤をおいていたかも今後の検討課題である。

今回の調査地は、今津遺跡の既存の調査地と離れて、どちらかといえば北寄りの地区である。今後周辺地の調査が進めば、当該時期の様相も次第に明らかとなろう。

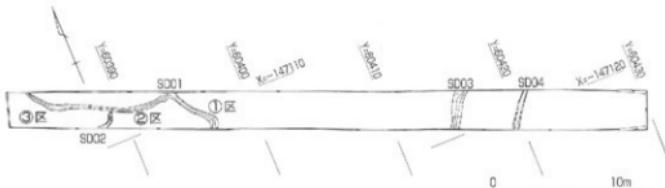


fig. 156 調査区平面図

### III. 平成12年度の通常事業に伴う発掘調査

#### 1. 深江北町遺跡 第9次調査

##### 1.はじめに

深江北町遺跡は、神戸市の東端部の標高3m前後の砂堆上に立地する遺跡で、弥生時代終末期～古墳時代前期及び奈良時代～平安時代の遺跡として周知されている。

これまで8次にわたる調査が行われており、今回の調査は第9次調査にあたる。これまでの調査では、弥生時代終末期～古墳時代前期の円形周溝墓や、奈良時代～平安時代の遺構・遺物が検出されている。特に奈良時代～平安時代における遺構や特徴的な遺物の存在は、本遺跡の北側に位置する芦屋市の津知遺跡や、芦屋麻痺寺遺跡等と共に古代山陽道の芦屋駅場及びその関連する施設の所在地として想定されており、從来より注目されている。

以上の既調査成果から、本調査においても各時代にわたる遺構・遺物の存在が調査前から想定されたが、調査の結果中世及び奈良時代～平安時代の遺構・遺物等が確認された。

今回の調査はマンション建設に伴うもので、工事によって影響を受ける部分についてのみ実施したものである。なお、今回の調査については、既に平成13年度に『深江北町遺跡第9次 埋蔵文化財発掘調査報告書』を刊行しており、本書では概要を記すに止まった。

詳細については報告書を参照されたい。

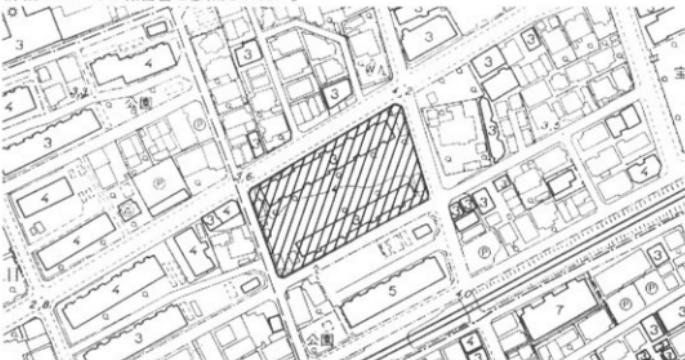


fig. 157

調査地位置図  
1 : 2,500

##### 2. 調査の概要

調査は残土置場の確保の理由から、1～5区の小地区毎に調査を実施することとし、まず北東隅の調査区である1区から調査を開始した。

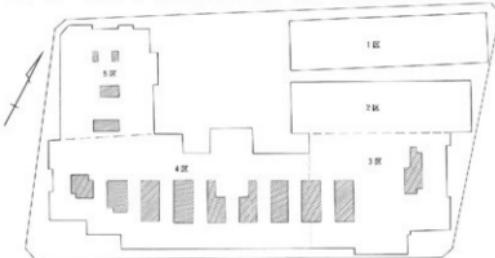


fig. 158 地区割図

新規対象外範囲

100m

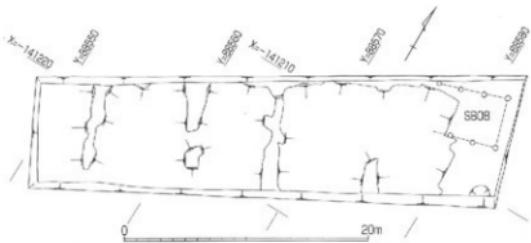


fig. 159 第1遺構面平面図

1 区 1区は、その大半が近年まで存在していた建物の基礎工事や解体工事に伴って大きく削平・擾乱を受けているため、遺構面がほとんど遺存していなかった。確認できた遺構面も1面のみである。遺構は東端部で掘立柱建物が1棟確認されたに止まった。

2・3区 2・3区では2面の遺構面を確認した。

第1遺構面 平安時代後期～鎌倉時代頃の遺構面と考えられる。溝1条・土坑状落ち込み1基・水溜  
遺構1基・集石遺構1基を検出した。

**第2遺構面** 奈良時代～平安時代の遺構面を確認した。

確認した遺構は湿地状遺構で、2区西部～4区頭部で肩部を検出したが、以東の2・3区の大半はこの湿地状遺構の内部にあたっており、東側の肩部は調査区内では検出されなかった。この湿地状遺構の内部からは多量の奈良時代～平安時代の須恵器・土師器・瓦・木製品等が出土した他、湿地状遺構が埋没した後に堆積した土層から平安時代頃の土器や木製品等と共に木簡（「承和（834～848年）」銘あり）が出土している。

4・5区では2・3区で検出した第1遺構面は確認されず、第2遺構面に相当する遺構面を確認した。検出した遺構は柱穴約280基、溝5条、溝状の落ち込み5基、水溜遺構1基などである。

柱穴は径0.8~1.2mの大型の掘形をもつものと、径20cm程の小型のものがある。7棟の掘立柱建物が確認された。



fig. 160 調査区平面図



fig. 161 木簡実測図

遺物No.	墨書	種類	器種	部位	出土遺構	遺物No.	墨書	種類	器種	部位	出土遺構
135	大カ垣	須恵器	环A	底部外面	SD 06	392	驛	土師器	?	底部外面	SR 01
	大カ			口縁部外面		393	告□	須恵器	环B蓋	天井部外面	SR 01
205	□	須恵器	环B蓋	底部外面	SD 08	394	驛カ	須恵器	环B蓋	天井部外面	SR 01
206	□	須恵器	环B	底部外面	SD 08	395	驛カ	須恵器	环B蓋	天井部外面	SR 01
207	少カ	須恵器	环B	底部外面	SD 08	396	驛カ	須恵器	环B蓋	天井部外面	SR 01
209	驛	須恵器	稜輪	底部外面	SD 08	397	□	須恵器	环B蓋	天井部外面	SR 01
261	驛	須恵器	环B蓋	天井部里面	SD 09	398	□	須恵器	环B蓋	天井部里面	SR 01
262	驛	須恵器	环B蓋	天井部里面	SD 09	399	□	須恵器	环B蓋	天井部里面	SR 01
269	大カ垣	須恵器	环B	底部外面	SD 09	400	□	須恵器	?	底部外面	SR 01
383	里カ	土師器	?	底部外面	SR 01	401	□	須恵器	?	底部外面	SR 01
384	北カ	土師器	?	底部外面	SR 01	402	東カ	須恵器	?	底部外面	SR 01
385	□	土師器	?	底部外面	SR 01	403	驛カ	須恵器	?	底部外面	SR 01
386	大カ西	土師器	?	底部外面	SR 01	404	百	須恵器	环B	底部外面	SR 01
387	東カ	土師器	?	底部外面	SR 01	405	□□	須恵器	环B	底部外面	SR 01
388	□	土師器	?	底部外面	SR 01	406	□	須恵器	环A	底部外面	SR 01
389	馬戸	土師器	?	底部外面	SR 01	407	□	須恵器	皿A	底部外面	SR 01
390	所カ	土師器	?	底部外面	SR 01	408	□百カ	須恵器	环B	底部外面	SR 01
391	東	土師器	?	底部外面	SR 01	669	驛カ新	土師器	环A?	底部外面	包含層
392	驛	土師器	?	底部外面	SR 01	670	驛	須恵器	环B蓋	天井部里面	包含層
388	□	土師器	?	底部外面	SR 01	671	驛カ	須恵器	环A?	底部外面	包含層
389	馬戸	土師器	?	底部外面	SR 01	672	驛カ	須恵器	皿A?	底部外面	包含層
390	所カ	土師器	?	底部外面	SR 01	673	卅一	須恵器	环B	底部外面	包含層
391	東	土師器	?	底部外面	SR 01						

表 墨書き土器一覧表

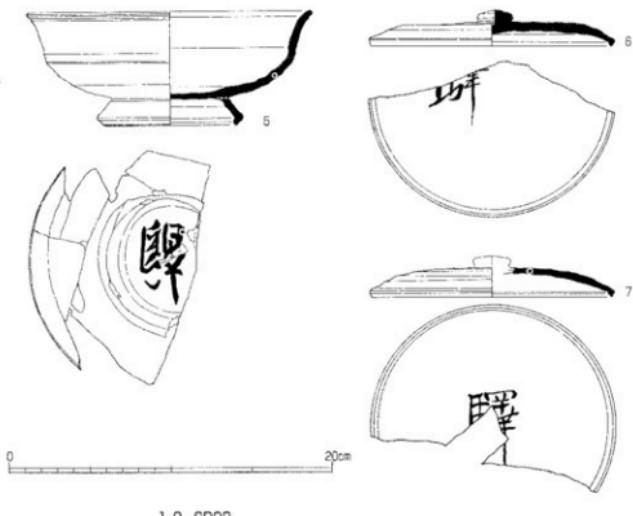


fig. 162 墨書き土器「驛」実測図

3. まとめ 今回の調査では、奈良時代～平安時代及び中世の遺構、多量の遺物が確認された。

遺構としては、4区中央部～5区において検出した、奈良時代～平安時代の多数の柱穴が特筆される。7棟の掘立柱建物は、大型の柱が遺存するものがみられることなどから、一般的な建物というよりは、官衙的な建物であることがほぼ確実といえよう。この場合、従来より想定されている、芦屋駅家に関連する施設であることが十分予想される。

遺物としては木簡や墨書き土器のほか、綠釉陶器、灰釉陶器、硯、土錘、蛸壺などの特徴的なものが一定量出土している。

木簡は4点出土している。「勘合木簡」1点、呪符木簡、荷札木簡各1点がある。

墨書き土器は39点の出土を確認している。墨書きの内容については表のとおりであるが、注目すべき点として、「驛」の墨書きが含まれていることである。

以上のように、今回の調査では、大型の掘形をもつものも含む多数の柱穴などの遺構を確認したほか、木簡や墨書き土器などの官衙的な特徴をもつ多種の遺物を検出することができた。

## にしひらの 2. 西平野遺跡 第3次-1・2調査

### 1. はじめに

西平野遺跡は六甲山南麓の傾斜地、石屋川左岸に位置する。今回の調査地点は、小谷にはさまれた尾根状に張り出す丘陵の鞍部から西側に下りはじめる部分にあたる。

付近には「大手筋」・「城ノ前」などの地名が残り、当地は室町時代にあった土豪平野氏の居城である平野城（御影村城）との関わりが指摘されている。また調査地の南約200m付近には伊賀塚とよばれる塚がかつて存在し、小字名にも「伊賀塚」が残る。西平野遺跡の東には摂津国兎原郡衙に比定されている郡家遺跡が存在する。

1988年に行われた西平野遺跡の第1次調査では、古墳時代初頭の堅穴住居、鎌倉時代の地業あと・石列・掘立柱建物、弥生時代の井戸などのほか、室町時代の大溝とそれに付随する石垣が確認されており、これは平野城に関連する遺構と推定されている。

1999年、今回の調査区、第1トレンチの隣地で行われた第2次調査では、弥生時代後期の土器溜まりなどが確認されている。



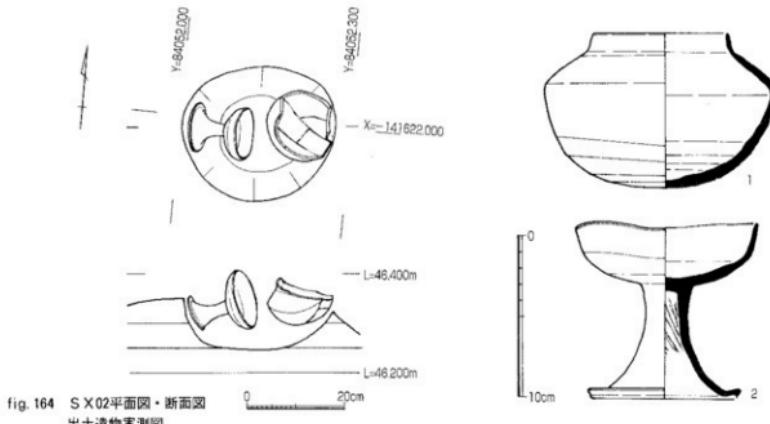


fig. 164 S X02平面図・断面図  
出土遺物実測図

上からその築造時期を判断できるような遺物も出土していない。

しかし、S X07の西南隅に須恵器を埋納した土坑S X02がある。埋納された須恵器は高杯と短頸壺で、壺の蓋として逆位の高杯を用い、この蓋を開けた状態で土坑に埋納したかのような出土状況である。高杯脚部の一部は欠けており、欠けた部分を下に、すなわち安定がいいようにして、この高杯が置かれていることもこの推測を助ける。この須恵器は古墳時代末頃のものであり、S X07はそれ以前の築造であることが分かる。

S X02とS X07が近い時期の所産であれば、この方墳状の遺構が山寄せの方墳である可能性も考えられよう。ただし、先年度行われたこの北側部分の調査では埋葬施設等の遺構は確認されていない。

**S X06** トレンチの東部で検出された。S X07の南辺を覆う拳大から一抱えもある礫の集積。礫間から瓦器小皿・土師器など鎌倉時代の遺物が出土している。

**S X01** S X07の西辺裾部で確認された石列。S X07の西辺に土砂が埋没していく過程でこの石列が置かれる。石列の周囲からは土師器足鍋・須恵器碗などが出土しており、中世に置かれた石列と推測される。

**S X03** トレンチ西半で検出された浅く広い土器溜まり。東半で中世の土器、西半で弥生土器が多く出土した。時期的に異なるものが重なっていると判断されるが、プラン的に判別することはできなかった。

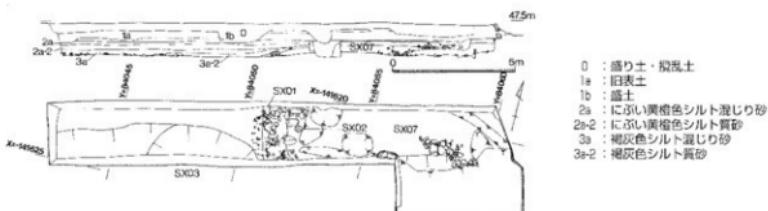


fig. 165 第1トレンチ平面図・北壁土層断面図

- 第2トレンチ** 南面する傾斜地にあたり、段状の造成によって北半はカットされ平坦面となっている。遺構面も1面である。これに対し、南半は本来の傾斜面が残っており、遺構面が2面検出された。
- 第1遺構面**
- 柱穴** 柱穴・土坑・溝等が確認された。
  - SK04** ブラン円形、径20cm前後のものが十数個検出された。
  - SD02** ほぼ東西方向に主軸をもつブラン隅丸長方形の土坑。1.6×0.7m、遺構検出面からの深さ20cmをはかる。遺物の出土はなかった。
  - SX08** 南にのびる浅い溝。幅約1m、遺構検出面からの深さ約10cmをはかる。弥生土器片が出土した。
- 第2遺構面**
- 南半のみで検出された遺構面。柱穴等が確認された。直上の遺物包含層や、遺構から出土する遺物は弥生時代のもので、この面は弥生時代の遺構面であると判断される。北半はカットされているため層位的に遺構面を区分できないが、当然古い第2遺構面の遺構も北半の存在するはずで、出土遺物からSD02などがそれにあたると推測される。

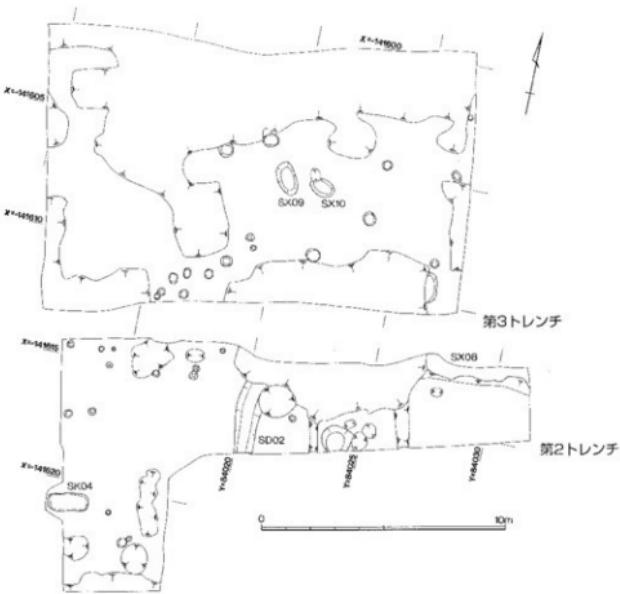


fig. 166 第2・3トレンチ平面図

- 第3次-2 北半部分は後世の擾乱により破壊されている。基本層序は、上層から最近の盛土、灰色砂質土（旧表土）、黄灰色砂質土（旧耕土）、黄橙色砂質土（床土）、灰褐色疊混じり砂質土（遺物包含層）、黄褐色疊混じり砂質土（上面が遺構面）となっている。
- S X09 長径1.4m・短径0.7m・深さ20cm程度のこの遺構は、埋土に炭を含んでおり、底部分には焼土がみられた。遺物がほとんど含まれていないため時期は不明である。
- S X10 S X09のすぐ東側で検出したこの遺構は、長径1.0m・短径0.6m・深さ20cmとS X09と規模は似通っているが、埋土に炭・焼土はみられなかった。
- 柱穴 レンチの南西部に直径20~30cmのやや小さめの柱穴、東部には直径50cm程の柱穴がみられたが、建物を構成するには至らなかった。小さめの柱穴からは中世の土器片が出土している。東側の柱穴からは土器がほとんど出土していないため、時期は不明である。
3. まとめ 今回の調査では、平野城に関連する遺構・遺物は確認されなかった。一方、古墳である可能性をもつ方形土壇が確認されたことは注目される。六甲山南麓には古墳時代後期の群集墳が多く存在している。東灘区内を見ても、東から森北町・本山・岡本・野寄・住吉の群集墳が存在し、西平野遺跡の東に隣接する郡家遺跡でも斜面地で横穴式石室をもつ小規模な古墳が複数確認されている。当地には伊賀塚という小字があり、この丘陵上に群集墳が営まれていた可能性も考えられるだろう。



fig. 167 第2 レンチ遺構検出状況

### 3. 都賀遺跡 第16次調査

#### 1. はじめに

六甲山南麓に広がる緩斜面地に存在する都賀遺跡は、西方に流れる六甲川が形成した扇状地の扇端部に立地し、標高は40~45mである。昭和62年度に都賀地区住宅改良事業に先立つ試掘調査で発見され、第1次調査が昭和63年2~3月に実施された。以来市営住宅や個人住宅の築造、街路の拡幅に伴う調査を重ね、今回の調査で第16次を数えることとなった。これまでに縄文時代早期の土器が出土した他、弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代末頃から古墳時代初頭の竪穴住居、奈良時代から平安時代と中世の掘立柱建物等が検出されており、縄文時代から延々と人々の生活が営まれ続けた複合遺跡であることが明らかとなっている。また遺跡周辺の微地形を見ると、東西方向には神前町4丁目を最高所として徐々に低くなる高台の様な地形であり、遺跡が形成された当初から居住に適していた状況が推察される。

今回の調査は神前町公園の造成に伴うもので、前年度からの継続である。

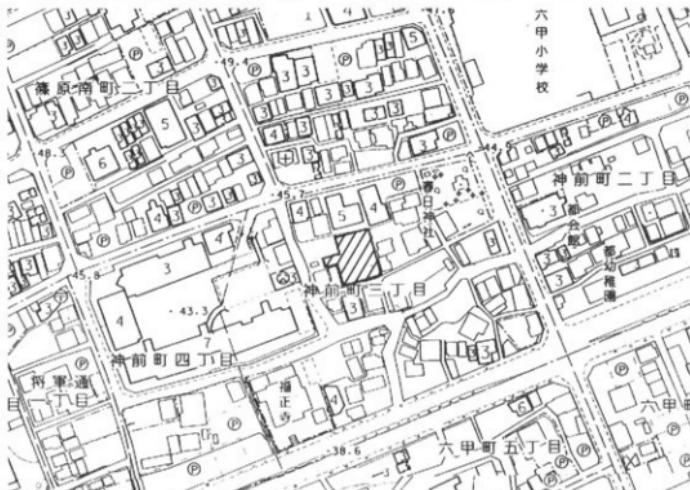


fig. 168  
調査位置図  
1 : 2,500

#### 2. 調査の概要

##### 基本層序

基本層序は下段調査区では上から順に近現代の整地土、宅地化直前の耕作土、遺物包含層である5層茶褐色砂質土、黄茶色~微砂、茶色シルト、黒茶色土、暗茶褐色土、ボルダー層上の堆積層である暗黄色微砂、ボルダー層である淡黃灰色礫と続く。第1遺構面は近世で茶褐色砂質土の上面、第2遺構面は中世と弥生時代末頃が同一面で検出されている黒茶色土の上面、第3遺構面は弥生時代中期で暗茶褐色土の上面、第4遺構面は縄文時代頃で暗黄色微砂の上面であるが、第2遺構面の中世の遺構はもう1面上から振り込まれていたが、識別できずに暗茶褐色土の上面で検出された可能性が残る。また上段調査区には黄茶色土~微砂・茶色シルトは分布していなかった。

- 第1遺構面** 近世の遺構面で、溝4条・土坑1基・石組1基の他、ピット26基を検出した。
- S D101** 上段調査区の南寄で検出した東西方向の溝である。15.1m分を確認したが、東西両調査区外に続くため全長は不明である。幅0.3~0.7m、深さ10~20cm、埋土は上から暗灰黄色砂質土と黄茶色土、下が灰黄色砂質土である。土師器・須恵器・陶磁器・瓦の破片が出土した。S D103・S D104と平行するため、近世の耕作に伴う溝と考えられる。
- S D102** 上段調査区の中央北半で検出した逆「L」字状の小溝である。長さ1.8m、幅0.3m、深さ約5cmで、埋土は淡黄灰色土である。瓦片が出土した。
- S D103** 上段調査区の北寄で検出した東西方向の溝である。8.6m分を確認したが、西端は調査区外に続くため全長は不明である。幅0.4~0.6m、深さ20~30cm、埋土は上が暗灰黄色疊混じり砂質土、下が暗黄灰色である。土師器・弥生土器・陶磁器の破片が出土した。S D101・S D104と平行するため、近世の耕作に伴う溝と考えられる。
- S D104** 下段調査区の南辺で検出した東西方向の溝である。10.5m分を確認したが、東端は擾乱で破壊され、西端は調査区外に続くため全長は不明である。幅0.1~0.2m、深さ10~15cmで、埋土は黄褐色砂である。遺物は全く出土しなかった。S D101・S D103と平行するため、近世の耕作に伴う溝と考えられる。
- S K101** 下段調査区の中央北端で検出した土坑である。長径1.1m、短径0.9mの楕円形で、深さ約30cmである。埋土は上から順に灰褐色砂質土、淡灰色土、褐灰色土である。土師器・須恵器陶磁器・瓦の破片が出土した。近世の耕作に伴う水溜と思われる。
- S X101** 上段調査区の中央南寄で検出した石組である。西側の一部は擾乱とS P123で破壊されているが、直径1.0mの円形で、深さ約50cmである。磁器片・瓦片が出土した。



fig. 169  
第1遺構面平面図

- 第2遺構面** 中世と弥生時代末頃の遺構面で、中世の掘立柱建物2棟と弥生時代末頃の溝6条・土坑3基・石組2基の他、ピット52基と洪水堆積を検出した。また下段調査区の南半には工事影響深度に達しないため、遺構面まで掘削していない部分がある。
- S B201 下段調査区の南東で検出した掘立柱建物である。柱間は東西方向は3間、南北方向は1間分を確認したが、北側にはさらに続く柱穴は存在しないため建物の北辺部分に相当すると考えられる。しかし東側は後の洪水によって遺構面が削られ、南側は調査区外に続き、西側は遺構面まで掘削していない部分となるため全体の規模や建物の方向は不明である。東西方向の柱列の方向は国土座標上でE21°Nである。掘形の大きさは20~50cm、深さは20~30cmであるが柱痕は判別できなかった。柱間の規模は東西方向が2.1~2.9m、南北方向が2.1~2.2mである。
- S B202 下段調査区の南辺で検出した掘立柱建物である。柱間は東西方向は3間、南北方向は1間分を確認したが、北側にはさらに続く柱穴は存在しないため建物の北辺部分に相当すると考えられる。しかし南側は調査区外に続いたため全体の規模や建物の方向は不明である。東西方向の柱列の方向は国土座標上でE24°Nである。掘形の大きさは30~50cm、深さは30~40cmであるが柱痕は判別できなかった。柱間の規模は東西方向が2.4~2.5m、南北方向が2.0mである。
- S D201 下段調査区の北西隅で検出した東西方向の溝で、西端でS D202と合流する。合流部分を含めて6.9m分を確認したが、西端は調査区外に続き、東端は攪乱で破壊されているため全長は不明である。幅0.3~0.7m、深さ15~20cm、埋土は黒灰色土である。合流部分は深さ約30cm、埋土は黒茶色土である。
- S D202 下段調査区の北西隅で検出した東西方向の溝で、西端でS D201と合流する。合流部分を含めて5.8m分を確認したが、西端は調査区外に続いたため全長は不明である。幅0.5~1.1m、深さ約20cm、埋土は暗灰茶色土である。
- S D203 下段調査区の中央部で検出した「く」の字状の小溝である。2.1m分を確認したが、南西端は攪乱で破壊されているため全長は不明である。幅0.3~0.4m、深さ約10cm、埋土は暗茶灰色砂質土である。
- S D204 下段調査区の北東隅で検出した小溝である。1.0m分を確認したが、東端は調査区外に続いたため全長は不明である。幅0.5m、深さ約10cm、埋土は暗茶灰色砂質土である。
- S D205 上段調査区の西端南寄で検出した東西方向の小溝である。1.4m分を確認したが、西端は調査区外に続いたため全長は不明である。幅0.3~0.4m、深さ約10cm、埋土は暗茶色土である。
- S D206 上段調査区の北東寄で検出した、北西から南東へ蛇行する浅い溝である。14.5m分を確認したが、北西・南東両端は調査区外に続いたため全長は不明である。幅1.5~3.3m、深さ10~40cm、埋土は部分により若干異なるが、主に上が黒灰色土、下が暗灰色土である。
- S K201 下段調査区の中央東寄で検出した土坑である。長径0.8m、短径0.4mの卵形で、深さ約20cmである。埋土は暗灰色土である。
- S K202 下段調査区の北東寄で検出した土坑である。北端は攪乱で破壊されているため規模は不明である。東西1.4m、南北0.9m以上の方形で、深さ約25cmである。埋土は暗茶灰色土である。

ある。

S K 203 下段調査区の北端東寄で検出した土坑である。東端は一部攪乱で破壊されているが、長径2.0m、短径1.1mの長卵形で、深さ約60cmである。埋土は上から順に暗い灰色砂質土、暗茶灰色砂質土である。

S X 201 下段調査区の中央北端で検出した堀形中に石を並べた石組である。長さ20~30cmの花崗岩の自然石を4個方形に並べていた。堀形の埋土は暗茶色土である。

S X 202 下段調査区の北端西寄で検出した堀形中に石を並べた石組である。長さ約50cmの花崗岩の自然石を1個東端に並べ、その西側に長さ20~30cmの花崗岩の自然石を4個方形に並べていた。堀形の埋土は暗茶色土である。

洪水堆積 上段調査区の溝SD 206の上と下段調査区の南東隅で検出した洪水堆積で、上段調査区で一旦東側の調査区外に出た後再び下段調査区に現れる。堆積土は上段調査区が淡灰黄色微砂、下段調査区が淡黄色砂である。

第3遺構面 弥生時代中期の遺構面で、方形周溝墓の周溝の可能性がある溝2条の他、ピットを6基検出した。また上段調査区の一部と下段調査区の多くは工事影響深度に達しないため、遺構面まで掘削していない。

S D 301 下段調査区の南西角で検出した北西から南東方向の溝である。2.0m分を検出したが、北西・南東両端は調査区外に統くため全長は不明である。幅1.1m以上、深さ約50cm、埋土は上が暗茶灰褐色土、下が暗茶灰色土である。

S D 302 溝SD 301の北隣で検出した東西方向の溝である。1.5m分を確認したが、東端は遺構面まで掘削していない部分、西端は調査区外に統くため全長は不明である。幅0.4~1.2m、

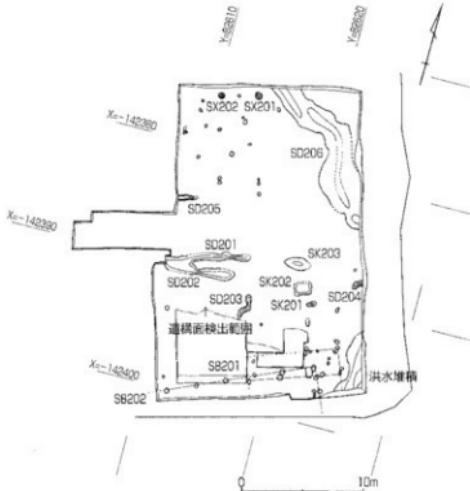


fig. 170  
第2遺構面平面図

深さ40~60cm、埋土は上が暗茶色土、下が暗茶褐色土である。

方形周溝墓？ 溝S D301・302に挟まれた部分は遺構面を検出した範囲の東端2.9mで、この部分が両溝を周溝とする方形周溝墓となる可能性がある。しかし東側が遺構面まで掘削していない部分に続くため、埋葬主体や東側の周溝の有無は不明である。ここでは方形周溝墓の可能性で留めておきたい。



fig. 171  
第3・4遺構面平面図

洪水堆積	上段調査区の北東から東壁に沿って下段調査区の南東に続く洪水堆積である。部分によつて堆積土は大きく異なり、上段調査区は上から順に淡黄色砂、淡黄灰色疊、淡灰褐色砂疊、下段調査区は暗褐灰色疊である。
第4遺構面	縄文時代早期以降弥生時代中期までの遺構面であるが、遺構から遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。これまでの都賀遺跡の調査では弥生時代前期の遺構・遺物は確認されていないため、ここでは特に限定せずに縄文時代頃としておきたい。ピットを2基検出したが、上段調査区の地下構造物の部分の、さらにその一部分しか遺構面に達しなかつたため、遺構の分布密度や性格等は不明である。
S P401	上段調査区の西側突出部で検出したピットである。直径0.3m、深さ25cm、埋土は黒灰色土である。
S P402	上段調査区の中央西寄で検出したピットである。直径0.5m、深さ50cm、埋土は上が暗黄色微砂と暗黄灰色土が混和したもの、下が暗黄灰色土である。
3. まとめ	第16次調査となる都賀遺跡であるが、これまでに縄文時代早期・弥生時代中期・弥生時代末から古墳時代初頭・奈良時代から平安時代・中世の遺構面を持つ複合遺跡であることが明らかとなっている。その中でも縄文時代早期の土器と弥生時代中期の方形周溝墓群は本遺跡の特徴を物語るものである。しかし宅地化が速くに進行していた遺跡であるため遺構面の遺存状況は悪く、今回の調査でも著しく攪乱を受けていた。
	調査地点は遺跡の中心部分の東方に相当し、微地形の観察では南東方向へ緩やかに傾斜していく様相である。調査の結果検出された遺構の分布密度は低く、あまり土地利用が行われていない部分であったと思われる。近世の遺構面では耕作に伴う溝と土坑を検出し、当時一帯の耕作地化が進行していたことが判明した。中世と弥生時代末頃の遺構面では中世の掘立柱建物2棟と、弥生時代末頃の溝・土坑等を検出した。遺跡の中心部分である市営住宅の築造に伴う調査では弥生時代末頃から古墳時代初頭の竪穴住居が検出されているが、今回は検出されなかったため当時は居住域ではなかったと思われる。弥生時代中期の遺構面では調査区の南西隅で溝を2条検出した。調査地点の細い現道を挟んで南隣は方形周溝墓を2基検出した第11・12次調査地点であり、今回の溝も方形周溝墓の周溝の可能性があるが、工事影響部分以外に続くため詳細は不明である。しかし検出した溝より北側には同様の遺構が存在しないため、方形周溝墓群の北端を確認したものと考えられる。縄文時代頃の遺構面ではピットを2基検出した。これまでの調査でも縄文時代と考えられる遺構は僅かしか検出されていないため、ピットは少量であってもその価値は高い。しかし遺物が出土しなかつたこと、この遺構面では調査区の大半が工事影響部分以外になることから遺構の実態や詳細な時期は不明である。また縄文時代頃の遺構面の基盤層であるボルダー層の深い位置から縄文時代早期の磨滅した土器片とサヌカイト剝片が1点ずつ出土した。従ってこれまで本遺跡で散発的に縄文時代早期の土器片が出土していたが、当時の生活痕跡はさらに標高の高い位置に存在しており、遺物はそこから土石流に混じって押し流されてきたものである可能性が考えられる。

## おのえ 4. 小野柄遺跡 第1次調査

### 1. はじめに

当遺跡周辺は、早くから市街地化が進んでいたため、今まで遺跡の存在が不明な地域であったが、平成10年度に試掘調査を実施し、はじめて発見された遺跡である。小野柄遺跡は、六甲山南麓から南に流れる生田川によって形成された北西から南東へ下る扇状地の末端部の緩斜面地に立地している。当遺跡の北西方向50~600mの範囲内には、弥生時代中期の方形周溝墓が発見された雲井遺跡が存在している。また、北東方向0.6~1.1kmの範囲内に、古墳時代と平安時代の集落跡である日暮遺跡が存在している。

今回の調査は第1次調査にあたり、旧小野柄小学校跡地における都市計画道路生田川右岸線整備事業に伴うものである。



### 2. 調査の概要

調査範囲については、建物部分とそれに付随する工事箇所であるが、今回の事業敷地内の東側には旧校舎の基礎により造構面が消失しているのが調査の際に確認されたためA地点、B地点については調査を実施していない。また、D地点については、現擁壁にあたるため、掘削は不可能と判断して調査は実施していない。C地点については $1.2 \times 5\text{ m}$ のトレンチ調査を実施したが、造構・遺物は確認していない。

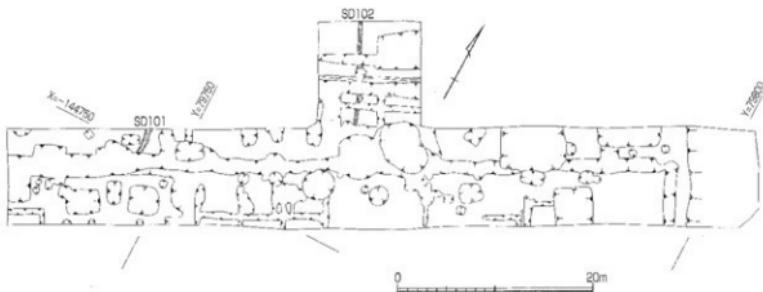


fig. 173 第1遺構面平面図

**基本層序** 調査地は、旧校舎の基礎により遺構面の大半は搅乱されていた。遺構面は全体で3面確認しているが、東側で2時期、西側で2時期の遺構面を確認することができた。

層序は、現地表面から約170cmまでが近・現代の盛土で、その下に旧耕土・暗褐色砂混じり粘質土（第1遺構面）、暗褐色粘質シルト（第2遺構面）、黄褐色粗砂混じり細砂質シルト（第3遺構面）となる。

**第1遺構面** 現地表面から約190cmの深さで第1遺構面になる。標高は7.9m前後である。調査区の西側で溝1条、北地区で溝2条を検出した。

**SD 101** 調査区の西側の北壁沿いで検出した幅約50cm、深さ約8cmを測る南北方向の溝である。溝の南側は、削平を受けていて検出できなかった。遺物の出土がなく、時期については不明である。

**SD 102** 調査区の北地区で検出した幅30~40cm、深さ約8cmを測る南北方向の溝である。南側は削平を受けていて、検出できなかった。遺物の出土がなく、時期については不明である。

**SD 103** 調査区の北地区で検出した東西方向の溝である。幅約50cm、深さ約10cmを測る。埋土の灰黄色砂質土から少量の須恵器片・土師器片が出土しているが、時期については不明である。

**第2遺構面** 第1遺構面から約10cm下がった暗褐色砂混じり粘質土をベースとする遺構面である。調査区の東側で溝4条と数基のピットを検出した。

**SD 201** 幅40cm、深さ12cmを測る東西方向の溝である。埋土の黄灰褐色細砂から少量の弥生土器が出土している。

**SD 202** 幅40~60cm、深さ約25cmを測る東西方向の溝である。埋土の灰褐色細砂から少量の弥生土器が出土している。

**SD 203** 幅30~40cm、深さ12cmを測り、SD 201とSD 202と同じ方向の溝である。遺物は出土していない。

**SD 204** 幅約30cm、深さ12cmを測る南北方向の溝である。遺物の出土がなく、淡灰色砂が堆積していた。

**ピット** 調査区の中央寄りで検出したピットで、いずれも直径20~30cm、深さ約3cmを測る。

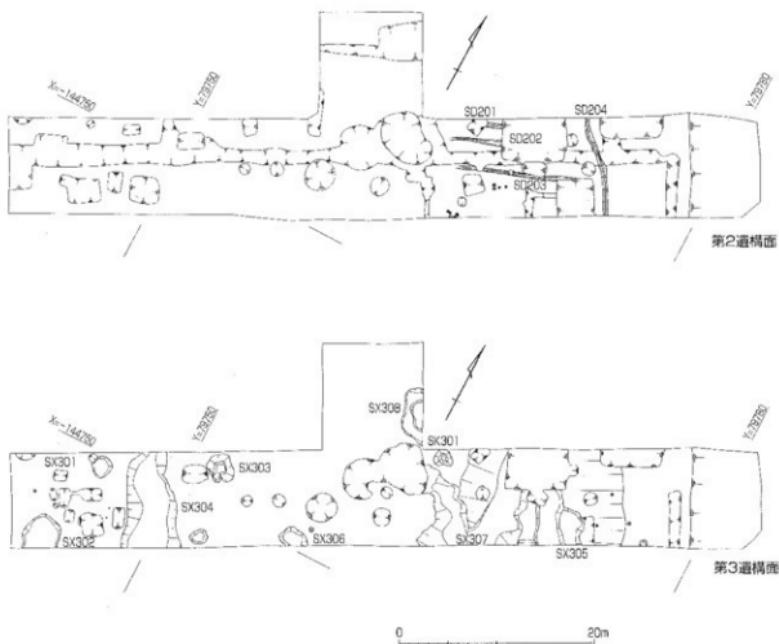


fig. 174 第2・3遺構面平面図

**第3遺構面** 現地表面から約220cmの深さで第3遺構面になる。標高は7.6m前後である。土坑、落ち込み状遺構、溝状遺構、流路を検出している。

- S X301 調査区西側の北壁沿いで検出した不整橢円形の落ち込み状遺構である。東西幅2.1m、南北幅2.2m、深さ約12cmを測る。遺物の出土がなく、時期については不明である。
- S X302 調査区西側端で検出した不整形の落ち込み状遺構である。東西幅3.9m、南北幅3.5m以上で、深さ約20cmを測る。遺物の出土がなく、時期については不明である。
- S X303 調査区西側の北壁沿いで検出した不整形の落ち込み状遺構である。東西幅2.5m、南北幅2.9m、深さ約25cmを測る。遺物の出土がなく、時期については不明である。
- S X304 調査区西側で検出した南北方向の流路である。幅3.0～6.0m、深さ10～20cmを測る。出土遺物はなく、褐色系のシルトが堆積している。
- S X305 調査区東側で検出した南北方向の流路である。最大幅13m、最深部約1.4mを測る。下層の灰色系の砂～細砂から繩文時代後期の上器が数十点出土している。
- S X306 調査区西側の南壁沿いで検出した。不整形の落ち込み状遺構である。東西幅2.2m以上、南北幅2.1m以上、深さ約10cmを測る。遺物の出土がなく、時期については不明である。

- S X307 S X305に合流する溝状遺構である。最大幅3.2m、深さ15~20cmを測る。
- S X308 調査区北地区の東壁沿いで検出した円弧を描く溝状遺構である。幅1.1~1.4m、深さ約10cm前後を測る。
- S K301 調査区の中央北壁沿いで検出した土坑である。東西幅1.8m、南北幅1.5m以上、深さ約30cmを測る。遺物の出土がなく、時期については不明である。
- 3. ま と め**
- 調査の結果、遺構面を3面検出したが、全体的に遺構の存在は稀薄である。第1遺構面で溝3条を検出しているが、遺物の出土がなく時期の確定ができないが、この遺構面の上層は中世の遺物が若干含まれていることから、中世以前と考えたい。第2遺構面も溝4条とピットを検出しているが、溝2条から少量の弥生土器片が出土しているのみである。そして、溝3条は、規模と方向が類似しているが、性格的なことは判らない。第3遺構面では、調査区全体で遺構を検出した、いずれも遺物を伴っていない。唯一、遺物が出土したS X305からは、縄文時代後期の土器片が十数点出土したが、あまり磨滅を受けていないことから、この調査区の北側にこの時期の居住域を想定できる。

調査地の遺構が稀薄なのは、擾乱が著しいこともあるが、遺跡の縁辺部に立地していると想定できる。土層の堆積や色などは、雲井遺跡に類似しているが、近隣での調査が皆無なので、遺跡の詳細については判らない。今後、この周辺において発掘調査が進めば、更に遺跡の具体的な性格が判明するであろう。



fig. 175  
調査地遠景

## かみさわ 5. 上沢遺跡 第38次-1~3調査

## 1. はじめに

上沢遺跡は、室内遺跡の南西300mに位置する。室内遺跡は、伝房王寺との関連が考えられている遺跡であり、昭和53年度に室内小学校のプール建設に伴う発掘調査によって平安時代の瓦が出土している。

今回の調査は松本線の拡幅工事に伴うもので、3回に分けて発掘調査を行った。



fig. 176  
調査地位図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

北から南に下がる緩斜面に位置し、南半では良好な遺物包含層が遺存していた。

## 第38次-1

中世の遺構面である。ピット多数を検出したが、建物としてはまとまらなかった。ピット内には石を充填するなどの柱の設げ換えの痕跡も確認された。なお、柱には切り合いや確認されており、少なくとも2時期は存在するようである。時期としては12世紀から13世紀にかけてのものと考えられる。

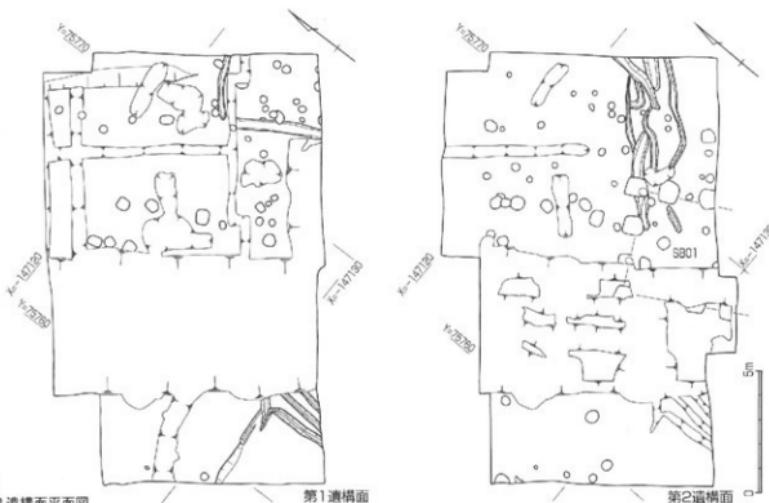


fig. 177  
第1・2遺構面平面図

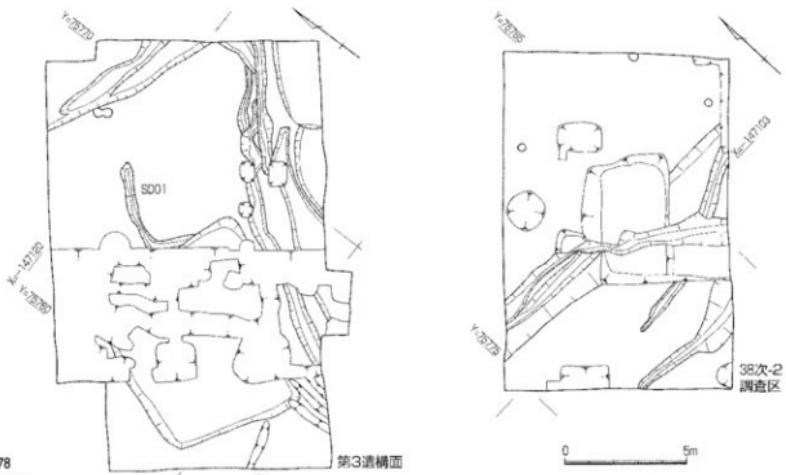


fig. 178

第3遺構面

第38次-2調査区平面図

**第2遺構面** 第2遺構面は耕作痕とそれを切るピットである。

S B01 一辺80cmの方形の柱掘形をもつ3間×3間の掘立柱建物である。柱間は、桁行140cm、梁行150cmを測る。桁行は、もう1間以上伸びる可能性がある。時期としては平安時代前半と考えられる。

その他、ピット多数を検出しているが、建物としてはまとまらなかった。

南半では、耕作痕を確認している。時期は不明である。

**第3遺構面** 本来第2遺構面で検出できた耕作痕の一部と溝を確認した。溝は浅いもので、弥生時代後期後半代のものと考えられる。

また、西半で大きな落ち込みを確認した。これに関しては、從前建物の建設時の影響により遺物包含層が下がってできた可能性もあり、確実に遺構とすることはできない。

**第38次-2** ピットと溝を確認した。第38次-1の調査区に比べ、遺構は稀薄である。ピットはまばらであり、建物としてのまとまりをもたない。

**溝** 盛土直下で検出したものである。出土遺物としては弥生土器のみであり、検出面から考えると溝の時期を示しているとは考えられない。規模は幅2.0m、深さ0.7mを測る。

遺構の検出面直下の遺物包含層から大量の弥生土器が出土したが、遺構等は検出することができなかった。

**第38次-2** 第38次-1調査区の西側に隣接する調査区である。第38次-1調査に比べ、遺構は稀薄になるようであり、わずかながら検出したピットも建物としてはまとまらなかった。その他はほぼ東西方向に走る耕作痕を検出したのみであった。西半では近世の河道が存在していることから、遺構面が削平を受けた可能性が高い。

**3.まとめ** 今回の調査では、掘立柱建物の他、耕作痕等が確認された。当初、奈良時代の遺構も検出されることが予想されたが、今回の調査区までは分布が拡がらないことが確認された。

## かつお 6. 勝雄遺跡 第7次-1・2調査

### 1. はじめに

淡河町勝雄地区は、淡河町の西端に位置し、西は三木市志染町、北は美嚢郡吉川町に接する地域である。加古川の一支部淡河川は、神戸市北区八多町屏風付近を源として西に流れ、淡河川の谷平野を形成し、勝雄地区南西部にあたる谷の狭隘部で北流して志染川に合流する。勝雄遺跡は、この淡河川の中流域右岸に位置し、小河川によって形成された扇状地及び中位段丘上に位置する飛鳥～奈良時代を中心とする集落遺跡である。今回の調査地は淡河川の左岸、曹洞宗永春寺が所在する丘陵から派生する中位段丘にあたり、平成11年度に調査実施した第6次-2調査区の西側に続く部分である。



### 2. 調査の概要

調査区は第6次-2調査区に続く東西トレンチをA区、西側の生活道路に沿った部分を

第7次-1 调査区に南からB区、C区として調査を実施した。その結果、A区においては床土直下に

基本層序 中世の遺物を含む遺物包含層が堆積し、明黄灰色シルトの遺構面を検出したが、A区西端

で段状に落ち込み、暗褐色砂礫層が分厚く堆積して谷状になり、B区では遺構面が検出されなかった。また、B区に一段下の水田に設定したC区では床土下は明黄灰色シルトの平坦面を残すが、遺物包含層・遺構は検出されなかった。

検出遺構 A区で検出された遺構は溝2条、土坑1ヶ所、性格不明の落ち込み1ヶ所、ピット14ヶ所である。

S D01 A区中央西寄で検出したトレンチに直交する素掘りのU字溝である。幅40cm、深さ10cm前後を計測する。埋土は淡灰褐色砂質土で土師器・須恵器片を含む。

S D02 S D01の西側で検出した幅1.7m、深さ15cmで断面皿状の素掘り溝。北壁沿いで西に緩やかに屈曲する。溝内の埋土は褐黄色粘性砂質土で出土遺物はなかった。

S K01 S D01の東に接して掘られた平面形が隅丸方形の浅い土坑。南北1.6m、東西0.9m以上、深さ10cm前後を計測する。土坑の西側はS D01によって削られている。埋土の淡灰褐色粘質土内から須恵器・青磁器片が出土した。

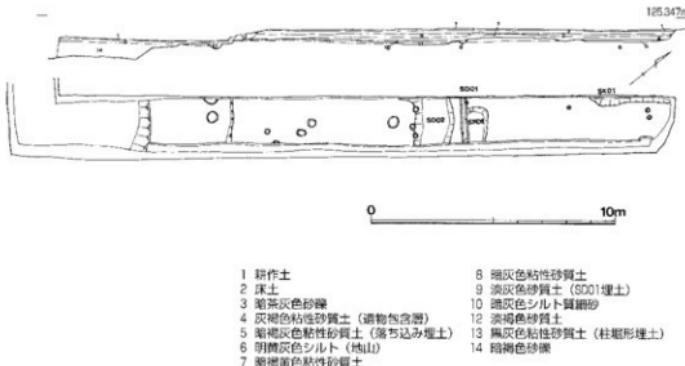


fig. 180 A区平面図・土層断面図

**S X01** A区東端北壁沿いで検出した北側に緩やかに落ち込む性格不明遺構である。調査区北東隅から約3.5mにわたって検出した。落ち込みの深さは検出範囲では10cm前後で、埋土は暗褐色粘性砂質土で、須恵器・土師器片が出土している。

**ピット** ピットの内、残存状況のよいものは、径20~30cm前後、深さ20~30cm前後で、坑底に河原石数石を敷くものもあり、柱掘形と考えられる。柱掘形の埋土内からの出土遺物はなく建物としてのまとまりを欠く。

**第7次-2 基本層序** 床土下に中近世の遺物を含む水田造成土が堆積しているものの、造成土以下は黄褐色シルトの地山となり、遺跡に伴う遺物包含層は検出されなかった。

**検出遺構** 調査区北端の地山面で梢円形のピットを検出した。ピットは径30cm、深さ20cm前後を計測する。礫を含む埋土から土師器片が出土している。

**3. まとめ** 今回の調査地は、曹洞宗永春寺の門前にあたり、当寺に関連する遺構が検出されることが予想された。しかし、今回の調査では鎌倉時代中期に比定される須恵器片口鉢片・土師器羽釜片が出土し、検出された溝・土坑・ピット群もほぼ当該時期に掘り込まれたと推定される。このことは永春寺の南方1kmの山上にあったと伝えられる丹生山明要寺の末寺高(光)泉寺と当寺の関連を窺わせる。勝雄遺跡第5次調査の第14区を調査した際に高(光)泉寺から地崩れによって流出した鎌倉時代と考えられる巴文軒丸瓦が出土している。また、高(光)泉寺は羽柴秀吉の三木攻めの際、明要寺攻略に伴い焼き討ちされ、焼け跡の木材・瓦が現在の永春寺の地に下ろされ「薬師古堂」と仮本堂が寛永年間には整備されたと伝えられる。このような永春寺の地に鎌倉時代以前には創建されていたであろう高(光)泉寺とは密接な関係を考慮でき、高(光)泉寺のあった鎌倉時代中期には「山下の僧房」等、山岳寺院関連施設の存在が当地に予想できる。今回の調査は支線排水路築造という調査区を限定した調査であるため、建物等を検出できなかったが、その一部を検出できたと考えられる。

## かつお 7. 勝雄遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

淡河町勝雄地区は、淡河町の西端に位置し、西は三木市志染町、北は美嚢郡吉川町に接する地域である。加古川の一支部淡河川は、神戸市北区八多町屏風付近を源として西に流れ、淡河川の谷平野を形成し、勝雄地区南西部にあたる谷の狭隘部で北流して志染川に合流する。勝雄遺跡は、この淡河川の中流域右岸に位置し、淡河川流域のなかでもっとも谷平野が発達した地域に占地している。

勝雄遺跡は、平成7年度の県営圃場整備事業に伴って実施された試掘調査以来、平成9年度以降7次にわたって圃場整備に係る発掘調査が実施されてきた。調査の結果、淡河八幡神社周辺の小扇状地に飛鳥時代～奈良時代後期の堅穴住居などが検出された。また、淡河川右岸の自然堤防上では弥生時代後期の溝などが発見された。このように勝雄遺跡は、現在の勝雄地区の集落域と重なりながら、南北約1.0km、東西600mの範囲に広がる弥生時代後期～鎌倉時代の集落遺跡と考えられる。



fig. 181  
調査地位置図  
1 : 2,500

**2. 調査の概要** 今回の調査は、集落生活排水管敷設に伴う調査で、生活用現道に敷設することから事前に既存埋設管の状況を把握するために試掘調査を実施し、これに随伴して道路下の埋蔵文化財の有無を確認する立会調査を75ヶ所について実施した。この立会調査の結果、淡河八幡神社周辺の南・西側の道路部で遺物包含層及び遺構を検出した。(A・B地区) また、淡河川右岸の自然堤防乃至は小扇状地の突端にあたるC・D地区で遺物包含層を検出した他、立会調査を実施しなかったE地区については、第4次調査・第5次調査に近接していることから調査を実施することとなった。

- A地区** 淡河八幡神社鳥居前の東西道路、旧湯山街道内の調査区で、東から西へ1～6区をA地区として調査を実施した。2区では現道路敷き直下で須恵器・土師器・陶器を含む暗茶褐色粘性砂質土の薄い遺物包含層を検出し、その下層に明褐色粘質土上面から掘り込まれた溝を検出した。溝は幅2.2m、深さ0.8mを計測する断面台形の南北溝である。埋土内からは土師器・須恵器・陶磁器片が出土している。この明褐色粘質土の基盤面は1区の半ばから急激に落ち込み、東側の淡河川河川敷に至り、2区の溝以外の遺構は検出されなかった。3～6区では東端で性格不明の石溜め状の遺構を検出したが、旧河道及び谷状地形を検出した以外は、パイプライン・水道管の既設掘形によって明褐色粘質土の基盤面は壊滅していた。
- B地区** 勝雄天神社に至る南北道路、平成10年度勝雄遺跡第4次調査の第3調査区に平行して走る道路内を南から7～10区・18区として調査を実施した。調査区の大半は既設道路の擁壁・パイプラインの掘形によって破壊され、調査区の下層部では沼沢地状の粘質土層を確認したに止まる。
- C地区** 平成11年度に実施した勝雄遺跡第6次調査地の北東側にあたり、小河川水無し川の扇状地突端において北西から11～17区に分けて調査を実施した。11・12・13区では旧耕土・床土直下で灰綠褐色粘質土・暗茶褐色粘性砂質土の須恵器・土師器を含む遺物包含層を検出した。遺物包含層の下層黄褐色粘質土上面において、11区ではピット4ヶ所、12区ではピット3ヶ所、溝1条、13区では落ち込み1ヶ所、溝1条を検出した。11区のピットは直径20cm前後の円形で、深さは20cm前後を残す。ピット内からは無茎石鏃1点が出土した。13区の溝・落ち込み内からは須恵器・土師器片が多量に出土している。地区東側の14～17区では旧耕土直下に暗茶褐色粘性砂質土の遺物包含層を残すものの、遺物の出土量が微少になり、ピット等の遺構もその密度が散漫になり浅くなる。17区の東端では遺物包含層も消滅し、遺構面となる灰黃褐色粘質土が急激に東に落ち込み、褐色砂礫を堆積させた谷地形となる。
- D地区** 第4次調査第9調査区の南側、東西道路部分の調査を実施した。当該地は小河川宮谷川の扇状地が自然堤防に接するあたりに占地している。東から19～22区に分けて調査を実施した。19～21区までは道路敷下層に褐色砂礫層及び盛土で下に黄褐色砂礫の地山が見られるのみで遺構等は検出されなかった。この黄褐色砂礫の地山は東に行くに従い下降し、谷状に落ち込む。22区に至ると旧耕土下に灰茶褐色砂質土の須恵器・土師器・弥生土器を含む遺物包含層が検出され、その下層の黄灰色粘性砂質土から掘り込まれた状態でピット4ヶ所、堅穴住居の掘形1ヶ所を検出した。

## 竪穴住居

22区調査区の中央やや東寄で検出した。東西7.2m以上、深さ40cmを計測する。東側壁体は擾乱坑によって上部が破壊されているが、下部で10cm程度残存し、幅16cmの周壁溝を付設するが、その内側1.2mでも幅30cm、深さ10cm前後の溝が巡っていた。住居の拡張に伴うものか、ベッド状遺構が付設されていた可能性がある。さらに内側の竪穴床面はやや中央に向かって傾斜し、上面に炭・灰の堆積が2~3cmみられる。この竪穴住居中央には東西1.2m前後の浅い落ち込みが観察でき、落ち込み上層部は黄褐色砂と灰が混在する土層が被覆している。落ち込み内でピット2ヶ所を検出した。落ち込みの中央やや西寄で検出したピットは直径50cm、深さ40cm前後を計測し、底部に石材を埋置する。埋土は黒灰色粘性砂質土で弥生土器片が出土している。その他竪穴の東側床面よりやや上層で50cm大の河原石が検出されたが性格は不明である。また、床面でピット1ヶ所を検出したが、検出面積が限定されているため、建屋構造に属するものか明確ではない。出土遺物は埋土内から28ℓコンテナ1箱分採集されているが、小破片が多く明確ではないが、タタキを残す尖り底の甕底部がみられることから弥生時代後期末~古墳時代初頭の竪穴住居と考えられる。

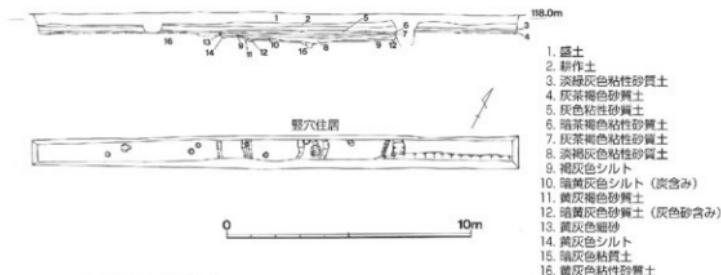


fig. 182 22区平面図・土層断面図

fig. 183  
竪穴住居検出状況

E地区 県道三木・三田線から曹洞宗永春寺に向かう南北道に設定した調査区である。南より23・24区として調査を実施した。南側の23区では南端で灰茶褐色砂質土を検出したが明確な遺構は検出されなかった。23区北側では水道管敷設坑に搅乱され、暗黄褐色砂礫層の堆積を道路下1.2mで検出し、遺構・遺物は検出されなかった。24区では県道三木・三田線南側で暗黄褐色粘質土の遺構面を道路下1.2mで検出した。厚さ15cm前後の暗茶褐色粘性砂質土の遺物包含層とその下層に茶褐色粘質土が被覆し、溝3条、ピット6ヶ所を検出した。南側中央部で検出した溝は茶褐色粘質土の下から掘り込まれ幅40cm、深さ20cmを計測する。また、調査区北端で検出した屈折する溝は幅22cm、深さ8cm前後の浅いものである。ピットは上層から掘り込まれたものは灰色粘性砂質土を埋土とし、下層からのものは暗茶褐色粘性砂質土を埋土としている。出土遺物については上・下層で分別できなかったが、弥生土器・須恵器が出土しており、下層が弥生時代に所属すると考えられる。

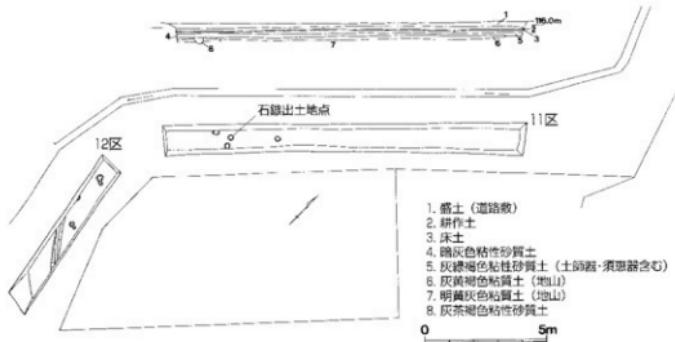


fig. 184  
11・12区平面図  
11区土層断面図

3. まとめ 今回の農村集落排水敷設事業に伴う試掘調査と発掘調査においては、現在の生活用道路内の調査のため、明確な遺構の把握はできなかったが、概ね遺跡の拡がりと遺跡立地の把握を検討するための資料を得られたと考えられる。

A・B区においては、淡河八幡神社が扇状地扇央部に位置し、後世の削平を被りながらも遺跡を遺存させ、淡河八幡神社の西側は幾筋かの河道が南北に走り、天神池の谷状地形が沼沢状に入り組んで拡がるものと考えられる。

C区は扇状地端にあたりやや北寄に良好な遺跡を残存させ、南側は緩やかな傾斜地となり遺跡が稀薄となる。この扇状地の東には小谷が形成されている。この地域では石鎧が出土した。その時期は特定できないが、弥生時代中期以前の遺跡を想起させる資料である。

D・E区では、D区東部で検出した谷状の落ち込みは、八幡神社西側に南北に走る谷状地形に続くものと考えられる。その東側は第4次調査第9調査区でも弥生時代の溝が確認されており、22区の竪穴住居址や24区下層の溝・ピットが同一面で検出されていることから、この低位段丘上には旧河川によって削られながらも弥生時代後期の集落遺跡が相当な範囲に展開しているものと考えられる。

## のせ 8. 野瀬遺跡 第1次-1・2調査

### 1. はじめに

野瀬地区は、淡河町の東側に位置し、帝釈山系北麓を西流する淡河川左岸の河成段丘上に立地し、標高約200~220mを測る。これまでに淡河地区農業基盤整備事業に伴って、平成7~9年度にかけて試掘調査が実施され、中世頃のピット、溝、土坑等も確認されている。今年度から本格的な調査が実施された。

なお、今回の調査については、既に平成13年度に『野瀬遺跡』を刊行しており、本書では概要を記すに止った。詳細については報告書を参照されたい。

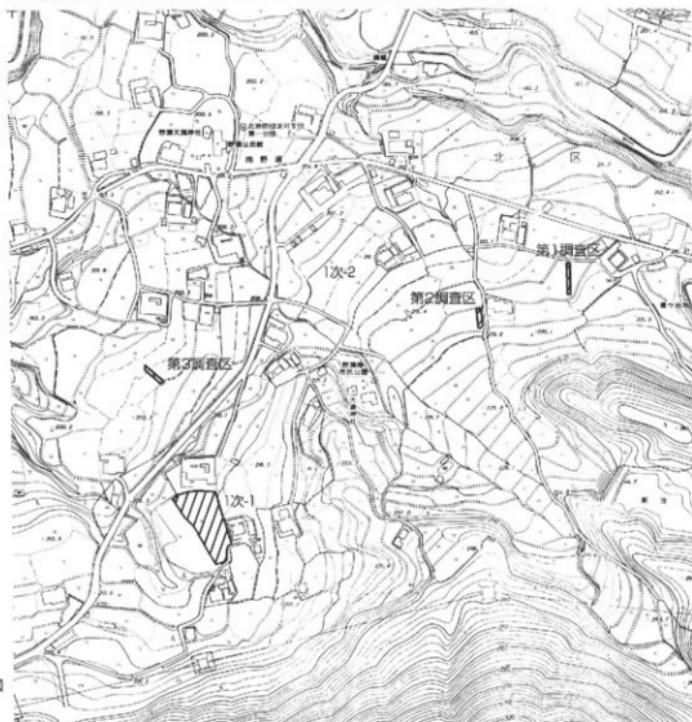


fig. 185  
調査位置図  
1 : 2,500

2. 調査の概要  
第1次-1 基本層序は、耕土・床土、遺物包含層、地山（遺構面）である。調査の結果、5棟の掘立柱建物、多数のピットと土坑、溝等を検出した。調査区の南側ほど、遺構の密度は稀薄である。

第1次-2 3カ所の調査を実施した。それぞれを第1調査区～第3調査区と呼称する。

基本層序 いずれの調査区も耕作土の下は、床土、暗灰色系砂質土、そして中世の遺物を含む灰褐色砂質シルトの旧耕土が堆積し、黄褐色系礫混じりシルトの遺構面となる。



fig. 186 第1次-1調査区全景

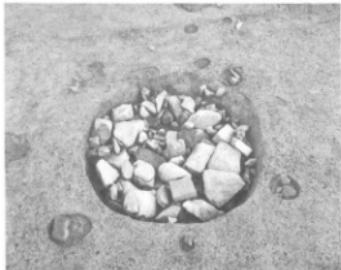


fig. 187 SK06全景

#### 第1調査区

水路予定部分で幅4m、長さ36mのトレンチで、北側に向かって緩やかに傾斜している地形である。トレンチの南半分は削平を受け、耕作土直下で地山面となり、その北側では灰褐色砂質シルトの旧耕土から中世の須恵器が少量出土した。遺構面精査を行った結果、遺構については確認されなかった。

#### 第2調査区

水路予定部分で幅4~6m、長さ21.5mのトレンチで、北側に向かって緩やかに傾斜しているが、北端では急激に落ちていく地形である。トレンチの南半分は削平を受け、耕作土直下で地山面となるが、北半分では水田造成の際の盛土下に堆積している灰褐色砂質シルトから中世の須恵器・土師器が出土した。なお、遺構面精査を行った結果、耕作に伴う牛馬等の足跡が確認されたものの、明確な遺構については確認されなかった。

#### 第3調査区

水路予定部分で幅4.5m、長さ29mのトレンチで、東側1/3は削平を受け、耕作土直下で地山面となる。地形は、西に向かって緩やかに傾斜している。灰褐色砂質シルトの旧耕土から中世の須恵器が少量出土した。

検出された遺構は、径10cm前後、深さ10cm前後の円形・楕円形のピットが6基である。いずれのピットからも遺物は出土していない。また、長さ約1.7m、幅約1mの不定形をした落ち込み状遺構であるSX01は、地山土と暗灰色土の混じった埋土から遺物の出土はなかった。その他、牛馬等の足跡が無数に確認されている。

#### 3. まとめ

今回の調査では、第1次-1調査では中世の遺構・遺物を検出できた。特に東北部において多数のピットと雨落ち溝状の遺構を検出できた。掘立柱建物も同時存在ではないが現時点で5棟確認でき、屋敷地が広がっていたものと思われる。西北部では、炭を焼いていた可能性が考えられている焼成土坑が1基検出されている。淡河地域では西北遺跡でも確認されており、その分布は広がりつつある。

遺物については、13世紀代と15世紀以降の須恵器・土師器・陶器等が出土した。少量かつ小片であるが、瓦器碗も存在する。また、繩文時代と思われるサヌカイト片がわずかに出土している。調査では繩文土器や繩文時代の遺構等は確認されなかったが、確認調査で石礫が出土している事実と合わせて考えると、近隣地に当該期の遺跡が存在する可能性が残されている。

その他、SX06からは鉄滓の出土が目立ち、今回の調査の中で特異な遺構である。

第1次-2調査では、各調査区が散在しており、なおかつ範囲が限定されていたため、遺跡の性格を判断する資料は得られなかった。

## ごばんちょう 9. 五番町 遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

五番町遺跡は、六甲山南麓の宍粟川左岸低地に広がる遺跡で、市営地下鉄建設に伴う試掘調査ではじめて発見された。これまでの調査で、縄文時代、古墳時代の流路、奈良時代～平安時代および中世の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査地は、標高約8mの西から東へごく緩やかに下がる傾斜地に立地し、第6次調査地に南接する。



fig. 188  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査は東西で2分割して西区より開始し、重機による反転作業の後、東区を調査した。

#### 基本層序

基本層序は、盛土・旧耕土・黒褐色土・灰黄褐色シルト質土（遺構面）である。遺物包含層である黒褐色土からは、量は多くはないものの、土師器・須恵器・弥生土器等が出土している。

遺構面は、西区は特に市営住宅基礎の攢乱が著しく、残存状況は悪い。東区西半と中央部分では基礎攢乱が目立つが、他は比較的に良好に遺物包含層・遺構面が残存していた。

遺構は、黒褐色土を埋土とする溝・土坑・ピットを検出した。

#### 西区

西区北端で検出した東西方向の溝である。東端は攢乱等のため、削平されていて不明である。幅1.1m前後、深さ50cmで、埋土は暗褐色粗砂質土や黒褐色砂混じりシルトである。遺物は古墳時代以前と思われる土器片や、サヌカイト片等が出土している。

#### S D 101

西区東半で検出した溝で、幅40cm、深さ10cm、埋土は黒褐色砂混じりシルトである。

#### S D 102

西区東半で検出した北西～南東方向の溝である。南東側は攢乱のため不明であるが、ほぼ15m分を検出した。幅1.3m、深さ30cmで、埋土は黒褐色粘質シルトである。弥生時代中期と思われる土器小片がわずかに出土している。

#### S D 103

西区東半で検出した東西方向の溝で、S D 101の南3mに平行して位置する。東端は攢乱などの削平のため消失している。幅50～100cm、深さ20cmで、埋土は暗褐色砂質土である。遺物は弥生土器やサヌカイト片が出土している。

- S R 201** 西区東半で検出した北西—南東方向の流路で、東側にカギ形に屈折する。幅は2m～4m、深さ1.5mで、底面は流れの激しさを物語るように凹凸が著しく、壁面にはオーバーハングする部分もある。埋土は主に粗砂から細砂で、シルト層をベースとする。下層の褐色粗砂から繩文土器片がわずかに出土した。
- S D 101～106** 同一面で検出しており、上記のS D 102・106は、S R 201の最終埋土層とも思われる。
- S D 301** 西区中央のS R 201よりも1層下層で検出した東西方向の溝である。東側はS R 201に切られており、不明である。幅2～3m、深さ65cmで、埋土は黒灰色シルトを主とする。遺物は出土していない。
- 東区** 東区東半で検出した東西方向の溝である。幅5～7m、深さ1m以上で、埋土は上層が黒色粘土、中層が黒灰色砂、下層が黒色粘土である。遺物は、古墳時代の高杯、甕等の土師器や須恵器が出土しているが、ほとんどが土師器で、中・下層からの出土が多い。また下層から木製品や種子が出土している。
- S D 110, 111** 東区西半で検出した北西—南東方向の溝である。幅2.5m、深さ1.2mで、断面は台形をしており、底面は多少の凹凸があるものの、ほぼ平らである。埋土は砂で、一気に埋没したような状況である。遺物は出土していない。
- S D 112** 東区中央で検出した東西方向に蛇行する溝である。S D 114と合流して、S D 107に接続する。幅70cm前後、深さ60cmで、掘形はしっかりしている。埋土は暗褐色～黒褐色シルトで、主に上層部から古墳時代の土師器が出土している。
- S D 113** 東区東北で検出した溝である。南側でS D 107に接続する。幅2.5m、深さ80cmで、埋土は黒褐色粘質シルトである。古墳時代の土師器が出土している。
- S D 114** 東区中央で検出したL字形に曲がる溝である。幅70～120cm、深さ50cmで、S D 107から派生してS D 112に合流、もしくは交差すると思われる。黒色粘土から古墳時代の土師器が出土している。



fig. 189  
東区全景

- S D115 東区中央で検出した東西方向に蛇行する溝である。攪乱で不明であるが、東端は北側に曲がってS D116に合流するようである。S P23に切られる。幅20~40cm、深さ20~40cmで、埋土は暗褐色粘質シルトである。
- S D116 東区中央で検出した北西-南東方向の溝で、S D112から分岐する。幅1m、深さ80cmで、埋土は上層が黒褐色シルト、下層が褐灰色粘土で、遺物は土師器が出土している。
- S K07 東区東端で検出した隅丸方形の土坑である。長軸1.5m、短軸1.2m、深さ70cmで、埋土は黒色粘質土である。遺物は最上層と中層、最下層から古墳時代と思われる多くの土師器が出土した。
- その他、西区東端で土坑を検出した。埋土は暗褐色土で、炭が混じる。遺物は出土していない。
- S B01 東区中央で検出した棟持柱をもつ縦柱の掘立柱建物である。南側は調査区外のため不明であるが、2間×2間以上と思われる。検出できた柱穴はS P12~18で、それぞれの深さは25~35cm、棟持柱のS P17のみは深さ40cmと大きい、S P12~14の列を基準に測定すると、軸方向はN-14°-Eである。遺物はS P14、15から土師器が出土している。
- その他、西区では灰褐色土上面で黒色粘性シルトを埋土とする小ピットを検出した。
- 下層流路 S R201掘削中、最下部で粗砂層を検出したが、この砂層はS R201ベース層の下に堆積するものと判明した。さらに大きな流路が存在することが想定できため、西区に限って何ヶ所か断ち割りトレーナーを設定して下層の確認に努めた。
- その結果、黄灰色シルト（S D301ベース層）・青灰色シルト・灰色シルト・灰褐色砂礫と堆積することが判った。西端では砂礫層は標高6.4mほどで水平に堆積するが、東端

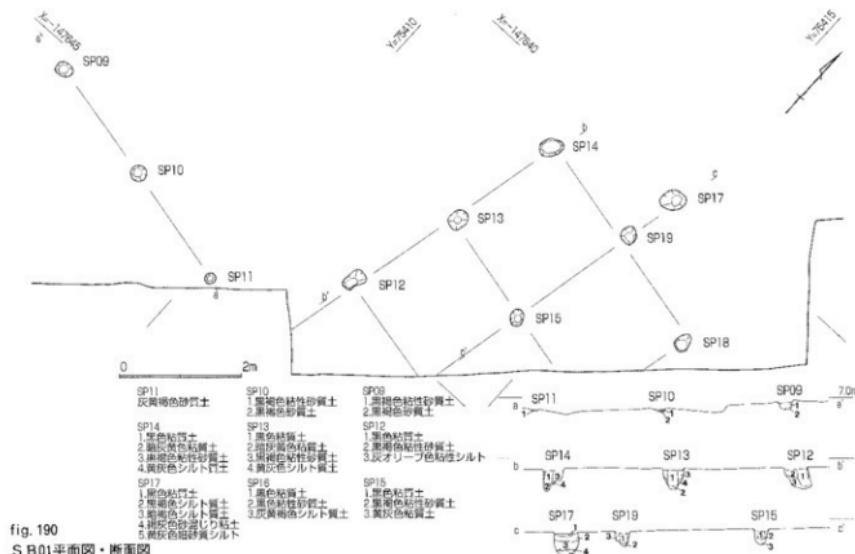


fig. 190 S B01平面図・断面図